主要登場人物

キン肉万太郎……かつて正義超人のリーダーで、伝説超人であるキン肉マンを父に持つ、弱冠14歳の少年。キン肉星の次期王位継承者。
テリー・ザ・キッド……万太郎の親友。伝説超人である、テリーマンの息子。
セイウチン……おとなしい性格だが、無類のうたれ強さとパワーを持つ。万太郎を兄貴分のように慕っている。
ガゼルマン……鋭い二本の角と均整のとれた筋肉ボディーの美しい正義超人。
スパイダー……突然トップクラス入りする。ファクトリーを二分する勢力、革命軍のリーダーとなるが…。
マグネットン……スパイダーの手下。革命軍では副将軍のような存在。
キン肉スグル……キン肉星の第58代大王であり、万太郎の父。
ビビンバ……キン肉星の大王妃であり、万太郎の母。

装丁／小松　昇(Pencil Studio)

キン肉(にく)マンⅡ世 second generations

～伝説の序章～

ヘラクレス・ファクトリー編

1



スーパーダッシュ

原作&イラスト ゆでたまご
文／浅野智哉

キン肉マンⅡ世 1 ～伝説の序章～ ヘラクレス・ファクトリー編
原作&イラスト ゆでたまご
文／浅野智哉
集英社スーパーダッシュ文庫
476

ISBN4-08-630072-9
C0193 ¥476E
9784086300728
1920193004762
定価 本体476円＋税



正義超人が勝ち得た平和が今、人類征服を目論(もくろ)む悪行超人によって破られた!? 再び旧世代の正義超人が立ち上がるが、若き悪行超人に悉(ことごと)く倒されていく。そこで彼らは、新世代正義超人(ニュージェネレーション)を選出すべく、超人格闘術大学校(ヘラクレス・ファクトリー)を設立した。そこにはキン肉マンの息子・万太郎(まんたろう)の姿もあり、彼らは日夜激しいトレーニングに励んでいたのだが…!?
大人気コミックス、アニメ化に続いて、ノベライズで登場!!

スーパーダッシュ

著者紹介

ゆでたまご

’78年「キン肉マン」が赤塚賞準入選となり翌’79年５月から「週刊少年ジャンプ」誌上にて「キン肉マン」の連載を開始し漫画家デビュー。’83年４月にはＴＶアニメが公開され、「キン消し」などのキャラクター商品の人気も合わせ爆発的ヒットとなる。コミック文庫に「キン肉マン」(全18巻)、「闘将!!拉麵男」（１～２巻)、スーパー・プレイボーイ・コミックスに「キン肉マンⅡ世」（１～16巻）がある。

浅野智哉(あさのともや)

1973年生まれ。フリーライター。ノベライズに『快傑蒸気探偵団』『GEAR戦士電童』。戦後日本の真のヒーローは長嶋茂雄ではなくアントニオ猪木だと信じて疑わない。

キン肉マンII世①

～伝説の序章～　ヘラクレス・ファクトリー編

原作&イラスト ゆでたまご
文／浅野智哉

集英社スーパーダッシュ文庫

キン肉マンII世①
～伝説の序章～
ヘラクレス・ファクトリー編
原作&イラスト ゆでたまご
文／浅野智哉
集英社スーパーダッシュ文庫


キン肉マンII世
second generations
~伝説の序章~
ヘラクレス・ファクトリー編
1
イラスト/ゆでたまご

キン肉マンⅡ世①

～伝説の序章～　ヘラクレス・ファクトリー編

原作&イラスト　ゆでたまご
文／浅野智哉

集英社スーパーダッシュ文庫

キン肉マンII世①
~伝説の序章~ヘラクレス・ファクトリー編

CONTENTS

スーパーダッシュ



登場人物紹介
MAIN CHARACTERS
股間にイチモツ
手にニモツ!
キン肉万太郎
出　身：キン肉星
必殺技：キン肉バスター、マッスル・ミレニアム
MANTARO
これがテキサス魂だ!
テリー・ザ・キッド
出　身：アメリカ・テキサス
必殺技：スピニング・トゥホールド、カーフ・ブランディング
TERRY THE KID


GAZELLEMAN
ガゼルマン
出身：タンザニア
必殺技：アントラーフィスト、サバンナフィート
心臓をつらぬいてやるぜ！
SEIUTIN
万太郎のアニキ〜ッ！
セイウチン
出 身：アイルランド
必殺技：生魚の早食い
キン肉スグル
出身：キン肉星
必殺技：キン肉バスター・キン肉ドライバー
SUGURU
へのつっぱりはいらんですよ！
あなた〜っ！
ビビンバ
出 身：キン肉星・ホルモンシティー
必殺技：ホルモン・ソバット
BIBIMBA

イラスト／ゆでたまご

第1章　若き超人たち



今からおよそ30年前――。
地球上には残虐超人、悪魔超人、完璧超人という人類征服をもくろむ悪行超人どもが暴れまわっていた。
そこに人類を救うべく正義超人がさっそうと現れ、悪行超人たちに格闘技によるフェアな対決を挑んだ。
正義超人のリーダーの名はキン肉スグル。
キン肉星第58代の王位継承者である。
強靭な鎧のような筋肉に覆われた逞しいボディから、仲間たちは彼のことを《キン肉マン》と呼んだ。
キン肉マンは他の超人にはない〝火事場のクソ力〟を駆使して、悪行超人たちを次々に撃破した。
そして正義超人たちの平和奪回のバトルは、最強の敵「邪悪の五大神」が作りだした運命の王子たちを破ることですべて終結した。
そして地球に平和と静寂が訪れた。
【キン肉マン】
【テリーマン】

【ロビンマスク】
【ラーメンマン】
【ブロッケンJr.】
【ウルフマン】
【バッファローマン】
【ウォーズマン】
【ジェロニモ】

ボロボロになりながらも、固い友情を原動力に最後まで戦い抜いた正義超人たち。
彼らは傷を癒すため、長い休息に入った。

「また会おう、みんな」
「ああ」
「必ずな…」

キン肉マンはキン肉星に帰り、正式に王位を継いだ。
テリーマンは牧場経営、ロビンマスクはイギリス王室に仕え、ラーメンマンは隠遁生活…それぞれが別々の道を歩みはじめた。
かつて命をかけて、全身をぶつけあった熱い闘いの日々を心に抱きながら。

そして彼らは《伝説超人》となった。

しかし西暦20××年——。
地球に残虐・悪魔と呼ばれる〝悪行超人〟が甦った。
またもや人類は悪行超人たちの暴威にさらされた。
人類を再び救うべく立ち上がった正義超人たちだが、30年近くも実戦から遠ざかっていたため試合勘はにぶり、年齢からくる肉体の衰えもあり、若い悪行超人たちの前にもろくも敗れ去った。
やがて地球に在留していた正義超人たちは全滅。全世界は悪行超人の時代にとって代わられたかに見えた。

だが、救世主が現れた。
頑丈なグレーの手袋とリングシューズ、スカイブルーの生地にイエローストライプが貫くボディスーツをまとって、胸には「KN」のオリジナルロゴマークが輝いている。
発達した腹筋に、見る者を圧倒するぶあつい胸板。丸太のように太い腕と首。
ぷっくり厚い唇と大きな瞳の覆面を被り、額からサラサラの前髪がのぞいている。

そして48の殺人技のひとつ〝キン肉バスター〟を使える。
そのすべてはキン肉星の王位継承者である証。
全身から若さと強さと父親ゆずりの熱い魂を放っている、弱冠14歳の少年――。
その名は、キン肉万太郎。キン肉マンの血を受け継ぐ、次期王位継承者だ。
後に正義超人のニューリーダーとなり、悪行超人に敢然と立ち向かう男の出現である。

「ち、ちょっと待ってよキッド～」
「さっさと走れ万太郎！」
「だって～、こんなのムチャクチャだよ～っ」
若い正義超人たちは早朝マラソンに励んでいた。
その中に万太郎がいた。
「頑張って、万太郎さん」
もうヘロヘロになっていて今にも倒れそうだが、仲間のキッドやセイウチンがなんとか背中を叩いた。
ここはアンドロメダ星雲・レッスル星に設けられた学校〝ヘラクレス・ファクトリー〟。正

義超人レスラー養成のための超人格闘術大学校である。かつて伝説超人たちも格闘のすべてを学んだ、2000年の歴史を誇る由緒ある訓練学校だ。

地球とキン肉星から選ばれた有望な若き正義超人たちが、日夜激しいトレーニングに励んでいる。その目的は、悪行超人たちのはびこる地球へ赴任できる正義超人を卒業生から選出するためだった。

そこで2000年の歴史の中でも比類の無い厳しいトレーニングが、万太郎をはじめ若い正義超人たちに課せられていた。

しかし。

父・スグルや伝説超人たちの期待を一身に背負った万太郎だったが、ドジで、いい加減で、逃げ癖があり、女の子にだらしない性格までもそっくり父親から受け継いでしまった。

またつい最近まで科学者か弁護士になりたかったほどガリ勉で、体育の成績は常に1。格闘技どころかスポーツなど一切やっていなかった。

地球赴任どころか、いつファクトリーから脱落するかわからない劣等生なのである。

しかし以前、万太郎は超難技の〝キン肉バスター〟で悪行超人のボーン・キラーとアナコンダを続けて葬った。その時、額には火事場のクソ力のシンボル〝肉〟マークが浮かび上がったという。

万太郎が高い潜在能力の持ち主であることに間違いなかった。

だが普段は、どうしようもない落ちこぼれ正義超人の見本のような男だった。

「もう家に帰りたいよ～。母上の手料理を食べて父上と遊んでお勉強して…あー、普通のコドモに戻りたいなぁ」

万太郎はノロノロと足を引きずりながら走った。

マラソン中はまるで地鳴りのような音が響いている。というのも、正義超人たちの頭と足胴にはそれぞれ100キロずつの鉄球が鎖でつながれていて、ゴリゴリと地面を削りながら走っているのだ。

「モタモタするなー！　遅れた奴はケッとばすぞ——!!」

拡声器を使ってもいないのに空気がビリビリ震えるようなバッファローマンの怒声が響いた。

「ひっ、ひぇ～～～～～っ！」

万太郎は震え上がって走るスピードを上げた。

ヘラクレス・ファクトリーにはロビンマスクやウルフマンやジェロニモたち、伝説超人たちの多くが講師として招かれている。年をとったとはいえ、かつて数々の修羅場をくぐってきた男たちである。いまの若い正義超人たちの実力程度では腕ズモウすらかなわない。まさに本物

の鬼以上に恐れられていた。

鉄球マラソンはそのまま、絶壁登りに移った。もちろん鉄球は外さないままだ。

全員、素手で断崖絶壁を登ってゆく。

「うっ…うわぁ〜〜〜〜〜〜〜!!」

「ぎゃあ!」

鉄球の重みに耐えられず、正義超人の何人かが絶壁から手を放し地面に落ちてゆく。

もちろん下にはネットなどない。大ケガはまぬがれないが、正義超人たるものケガなどを恐れていては戦えないのだ。

ここでも万太郎は飛び抜けてイケてなかった。

「くっ…このっ…。ふぇ〜、こんなの登れっこないよぉ」

ちょっと這い上がっては鉄球の重みにズルズル引きずられ、ほとんど登ることができない。

一方、見事なボディバランスと背筋力でスイスイと登ってゆくキッドが万太郎を見下ろして言った。

「なにモタモタしてるんだ! その筋肉はただの見せかけか!」

「うるさいなっ。このカラダは生まれつきだよっ」

キッドはだらしない万太郎の言葉にチッと舌打ちした。

彼の本名はテリー・ザ・キッド。ジーンズにサスペンダー、ショルダー・レッグ・アームを守るブループロテクターが印象的な、精悍な少年である。

左目の上に絆創膏、後ろ髪の長い金色の髪に額に〝K〟のタトゥーマーク。優しいタレ目は父親によく似ている。キッドは伝説超人でありキン肉マンの親友、テリーマンの息子だった。

ファクトリーに入学当初は№1にこだわるあまり万太郎を一方的にライバル視していたが、父の代から続く仲間の絆の強さにうたれ、いまでは万太郎の親友として訓練に励んでいる。もっとも、成績は万太郎に比べて格段に良かったが。

キッドは励ましもこめて、ワザと強めに万太郎に言った。

「ゴチャゴチャ言うんじゃないっ。こんなトコで脱落したくはないだろ⁉」

「脱落…？　そっか、やめちゃえばいいのか」

すると万太郎はスルスルと壁を降りはじめた。

「こっ…コラ――ッ！　万太郎――！」

「じゃあね～、キッド頑張ってねー」

全宇宙の敵、悪行超人に対抗する技を研こうと志をたててファクトリーに入校した万太郎だが、それとは反対にいつも身体は逃げることばかり考えてしまう。

――なんでこんな奴が、あのキン肉マンの息子なんだ？

ファクトリーの正義超人たちの多くは誰もがそう不思議がっていた。
その時、テリーと同じ位置で壁にしがみついていたセイウチンが叫んだ。
「万太郎さーん！　逃げちゃダメですよー！」
叫んだ勢いで、身体のバランスを崩した。
「…うわっ…！」
岩を掴んでいた手がはずれ、セイウチンの身体はフワリと宙に浮いた。
そして鉄球の重さがそのまま落下速度に変わった。
「セイウチンッ…！」
キッドが手を伸ばすヒマもなかった。他の超人も見ているしかできなかった。
セイウチンは地面に真っ逆さまに落ちて行った。
おとなしい性格だが、無類のうたれ強さとパワーで正義超人の中でも一目置かれていたセイウチンだが、ここで脱落か——誰もが目を閉じた。
しかし、セイウチンが地面に激突する寸前に何者かが飛び出した。
「そりゃ〜〜〜〜〜〜〜！」
「万太郎さん…！」
万太郎だ。万太郎は壁の出っ張りを蹴り、地面スレスレの位置からセイウチンに向かってジ

ャンプした。
北海育ちで毛むくじゃら、身体も万太郎より一回り大きいセイウチンの巨体を、万太郎の太い腕はしっかりと受け止めた。
セイウチンは地面への激突をまぬがれた。
そして万太郎の腕の中でキョトンとしていた。
「ま…万太郎さん…？」
鉄球を4つもぶら下げ、超重量級のセイウチンの身体を落下中に受け止めて、万太郎は汗ひとつかいていなかった。
「ケガはないか？　セイウチン」
それは逃げ帰ろうとした男の顔ではなかった。額には〃肉〃の文字が浮かんでいた。
ファクトリーでの激しいトレーニングでは脱落者が後を絶たなかった。しかし、仲間同士で助け合うことは禁止されていない。だがほとんどの正義超人たちは自分がトレーニングを消化することに手一杯で、大ケガしたり逃げ出してゆく仲間たちをそのまま見過ごしていた。
そんな中、万太郎だけは違っていた。
誰よりも根性が無く、成績も最下位、いつも教官に怒鳴られてばかりだが…もし仲間が危険な時は、どんな時でも身を捨てて助けの手をさしのべた。たとえ自分が逃げ出そうとしていた

時でも。
その時に発揮する不思議なパワーは、他のどの正義超人にも無いものだった。
万太郎はいまこうしてセイウチンを助けたが、それも一度や二度では無かった。成績では大きく差のあるふたりだったが、セイウチンは万太郎を兄貴分のように慕っていた。
「万太郎さん！　ありがと〜〜〜〜！　大好きだす〜〜〜〜！」
セイウチンはスキ間からキバの伸びる唇をブチュブチュと万太郎の顔に押しつけた。
「おわーっぷ！　気持ち悪い！　やめろやめて！」
万太郎はセイウチンを無理やり引き離そうとした。するとセイウチンが万太郎のボディスーツの尻の部分を掴んだ。
ビリビリビリッ。スーツが破れて万太郎のケツがプリンと丸出しになった。
「待って万太郎さ―――ん！」
「おわ―――！　来るな〜〜〜！」
万太郎はセイウチンから逃げ出し、ケツを丸出しのまま壁をスイスイ登って逃げた。力を入れたせいでオナラがブリブリ出ている。
「わっ、こいつクサっ！」
他に登っていた正義超人たちは迷惑そうに万太郎にルートをゆずった。

なんだ登れるじゃないか――！　というバッファローマンの怒声を背に、万太郎はあっという間に壁を登り切ってしまった。

その様子をキッドは苦笑いまじりに見ていた。

「やれやれ…」

成績は悪くても、万太郎はキッドたち実力のある正義超人たちの中心的なムードメーカーとなっていた。

ヘラクレス・ファクトリーのトレーニングは過酷を極める一方だった。

鉄球を付けたウンテイ綱渡り、ワニやクマなど肉食獣とのスパーリング、鉄球をぶつける腹筋に熱く焼けた鉄板の上でのバトルロイヤル…血気盛んな若い正義超人たちといえども、ついてゆくのは容易ではなくファクトリーの生徒の数はどんどん減っていた。

万太郎たち第一期生の入所時の人数は500人。特訓期間は三カ月間である。

しかしわずか一カ月で、半分の250人にまで減っていた。

卒業して地球へ赴任できる人数はさらに限られている。

厳しいトレーニングだけでなく、残った正義超人たちはライバル同士のせめぎ合いにも神経を注がなくてはならなかった。

ファクトリーは全寮制である。
岩作りの巨大なコロッセウムに囲まれた広大な敷地の中に、最新設備を備えた校舎が建っている。校舎の上にはふたりの裸の正義超人が戦っている最中を表した、全長50メートル近い巨大なシンボル像が設置されている。
シンボル像が見下ろす形で、若い正義超人たちが暮らす施設が点在している。
正義超人たちが寝泊まりする寮のほか、第1から第10まである格技場、ウェートトレーニング専用の体育堂に超人身体学の書籍をすべて揃えた図書館、講堂や学習室、正義超人たちの応急手当を行う病院もある。娯楽施設は一切無いが、正義超人たちが訓練生活を送るには十分な施設だった。
敷地内には広い公園もある。夜の自由時間になれば、息抜きしたい正義超人たちの散歩コースとなった。
その夜もまた、ひとりの正義超人が散歩していた。
実力も成績も中ぐらいの、いま残っている正義超人たちの中ではごく普通の生徒、スパイダーである。手足が長く、エサを捕らえるクモのような関節技を得意とする若手の正義超人だ。

スパイダーは入浴した後、トレーニングの疲れを癒そうと公園をひとり散歩していた。そして木陰のベンチにどっかりと腰を下ろした。
「ふぅ。きれいな星だな」
彼の見る先には満天の星空があった。
レッスル星は天文区画からみて、アンドロメダ星雲の星空が最も良く見渡せる。正義超人たちのトレーニングの地としてだけでなく、閑静な天文スポットとしても宇宙の若者たちに人気があった。
スパイダーは足を大きく広げ、のんびりと夜気を吸った。
その時、どこからか声がした。
（こいつにするか…………）
スパイダーは周りを見渡した。
「ん、誰かいるのか？」
周りには公園の植樹林と舗装された歩道があるだけだ。
はるか向こうに同級生の正義超人が何人か連れ立って歩いている。しかし話し声も聞こえない距離だ。スパイダーの側には誰もいない。
しかし、また声だけが聞こえた。今度ははっきりと。

「おい。お前、名前は？」
スパイダーは身構えた。
「なっ……誰だ!?」
ガサリ――葉擦れの音がした。
スパイダーは見上げた。ベンチの後ろの樹。そして――。
ビュッ!!
樹の上の方からベトベトしたものが落ちてきた。それはスパイダーの身体にからみつき、あっと言う間に動きを封じてしまった。
「ぐわっ…な、何だこれは!?　…ぐぅっ！」
それはネバネバした糸だった。
スパイダーは遠くを歩く正義超人たちに助けを呼ぼうとした。しかし全身にからみつく糸はそのまま腕と首を絞め上げ、スパイダーの声と動きを殺してしまった。正義超人としての実力はそれなりにあるスパイダーだが、どんなにもがいても強靭な糸はまったく緩むことはなかった。
スパイダーは必死に糸の伸びている先を見た。夜闇と繁った葉のせいで何も見えなかった。代わりに不気味な声だけが聞こえた。

「お前の名前を教えろ」
「…貴様、何者だ…！」
「質問にだけ答えろ」
「ぐわわ…っ!!」
スパイダーにからみつく糸がさらに絞め上がり、全身の骨がメキメキと音をたてた。スパイダーは息も苦しい中でなんとか答えた。
「す、スパイダー…」
「どこのクラスの何番だ？」
「い、Eクラスの16番…」
「いいだろう。正義超人登録証はどこだ」
「…ろ、ロッカーの上段にある…」
「ロッカーナンバーは？」
スパイダーは姿の見えない相手に、次々に自分の情報を漏らした。
ファクトリー内で必要な情報をひととおり聞きおえた後、声の主は静かに言った。
「ありがとう…感謝するよ、スパイダー」
低くくぐもったような声とともに、ガサリガサリと音がした。

それは何本もの足で這い回るような音だった。
スパイダーの目に、ボンヤリと樹を這う不気味な虫が見えた。
2メートル以上はありそうな、不気味な姿だった。スパイダーは戦慄しながら言った。
「い、いったい…誰なんだ!!」
「俺か？　…いいだろう、礼代わりに教えてやろう」
「…………？」
「以前、ファクトリーで仲間のアナコンダが世話になったらしいな」
「…!!　悪行超人かっ!?」
スパイダーがそう叫んだ瞬間、目の前に二本の巨大な牙がバックリ口を開けた。
「お前の身体と名前、そっくりいただく」
牙はスパイダーの耳の後ろを挟み込むようにグシャリと閉じた。スパイダーの悲鳴は粘液の中にのみこまれた。
牙の先端から毒液がドクドクと注入される。スパイダーの鍛えられた筋肉は肉と骨と一緒にドロドロに溶けていった。
チューチューと音をたてて肉液が吸い込まれてゆく。
数分後には、ベンチにスパイダーの身体の形の皮だけがそのまま残っていた。

樹上からその男はスパイダーの皮を引っ張りあげた。
背中に切れ目を入れ、腕と足を通した。
「なかなか快適じゃないか…フフフ」
男は何本もある足を背中に格納した。そして樹上からスタッと飛び降り、何事も無かったように公園の歩道を歩きはじめた。
空にはアンドロメダの星空が広がっている。その星空をバックに、正義超人のシンボル像が星光を受けて屹立している。
像を見上げてスパイダーは呟いた。
「…これから楽しいパーティが始まるぞ」
巨大な牙の隙間から、真っ赤な舌がなめずっていた。

第2章 派閥抗争



「万太郎は大丈夫かのぅ〰〰〰〰」

ミキサーにかけてドロドロに柔らかくなった牛丼をズルズルとすすりながら、スグルは寂しそうに呟いた。

マッスルガム宮殿——大キン肉星雲第5惑星のキン肉星のすべての政治を司る王室宮殿である。その住人であり最高責任者・第58代大王のキン肉スグルは、一人息子のいない寂しさをかみしめていた。

「なぁビビンバ。万太郎から電話は無かったか？」

スグルの妻、大王妃ビビンバは牛丼のドンブリを下げながら言った。

「ありませんってば。あなたったら、一時間ごとに訊いてますよ？」

スグルはシュンとなってソファーに身を沈めた。

かつて正義超人のリーダーとして戦った伝説超人のスグルだが、すでに54歳。長く激しい闘いで傷ついた身体はもうボロボロで、いまとなっては得意のキン肉バスターはおろか腕立て伏せもロクにできない。歯も弱り、胃潰瘍にもかかって柔らかい食事しか摂ってはいけない。輝かしい実績はすでに過去のもので、現在はそこらへんの初老の男と同じである。

だが生来のカリスマ性と正義感で、いまも大王として歴代最高の人気を誇っていた。

そんなスグルの宝物は一人息子の万太郎だった。

スグルが40歳すぎてから生まれたせいで、目に入れても痛くないほど万太郎を可愛がった。そのせいで甘ったれでワガママで根性の無い、スグルの悪いところだけよく似た少年に育ってしまった。その万太郎がヘラスクレス・ファクトリーに入学したのである。

最初は心配のあまりなかば強引にファクトリーについて行ったが、万太郎の意外な逞しさを目の当たりにして、ビビンバに叱られながらトボトボと帰って来たのだ。

スグルはビビンバに、すがるように訊いた。

「本当に大丈夫かの？　あの子はお腹の弱い子だから、ファクトリーのメシで腹でもくだしておらんかな〜？」

「もう赤ちゃんじゃないんだから、気にしすぎですよ」

「勉強しか出来ない子じゃからイジメられたりとかしてないかなぁ？」

「バッファローマンさんやロビンマスクさんが教官なのよ。みんな怖くて、そんなヒマあるわけないじゃないの」

「ちょっと見に行くぐらいダメかのう…」

「えーい！　うるさ———い!!」

ビビンバは赤いヒールでスグルの座っているソファーをドガッと蹴った。スグルはその剣幕に押されてちょっとオシッコを漏らしてしまった。

「ひいいいっ！」

「いい大人がゴチャゴチャ心配してんじゃないの！　いいかげん子離れしなさい！」

　フーフーと肩で息をするビビンバを見てスグルは呟いた。

「…お前も昔は可愛かったが、最近は本当に死んだママによく似てきたなぁ…」

「なんですって⁉」

「いえなんでもないですっ」

　ビビンバはフウと息をついてスグルの隣に座った。

「万太郎はあなたの目の前で悪行超人を倒したんでしょう？」

「ああ…。見事なキン肉バスターだったわい。一番強い頃のワシにはまだまだじゃがな」

　嬉しそうに話すスグルに、ビビンバは微笑んで言った。

「あの子はもう、あなたが思ってるほど弱い子じゃありませんよ。きっと、もっと強くなって立派な正義超人になってくれるわ」

「…うむ、そうあってほしいの」

「間違いないわよ。だって、あの子はキン肉マンの息子なんだもの」

　そう言って、ビビンバはわずかに声を震わせた。

「…本当はね…万太郎にはいつまでも私たちの側にいてほしいの。家族みんなで静かに暮らし

ていけたらどんなにいいか…でも、そうもいかないわね」

ビビンバは口に手をやって涙をこらえた。万太郎を地球の悪行超人たちと戦わせることに、ビビンバはスグル以上に神経を細らせていた。ひとりの母親として当然のことだ。

スグルは優しくビビンバの手を握って言った。

「お前も心配なんだな」

「当たり前でしょ。私たちの、たったひとりの息子なんだもの」

「悪かった…」

スグルは優しくビビンバの肩を抱いて言った。

「ワシはもう、静かに万太郎を見守るだけにする。それがあの子のためにもよいに違いない。これからの戦い、ワシらは何もできないんじゃからな」

「そうよね…。私たちのボーヤを信じましょう」

スグルとビビンバは固く手を握りあった。

ヘラクレス・ファクトリーから歩いて10分ほどの場所に、レッスル星の住人たちが通う歓楽街があった。ゲームセンターやボウリング場などのプレイスポット、若者の集まる飲食店が軒(のき)

を連ねている。

厳しい修業中の身とはいえファクトリーの正義超人たちはまだ若い。気の合った仲間同士で、夜の自由時間に遊びに繰り出す正義超人たちはたくさんいた。

まだ修業中の少年たちだったが、それぞれ飲食店の店主たちはいつか宇宙の平和を守る戦士の候補生だと思い、暴飲暴食を黙認していた。

それはファクトリーの教官たちも同じである。バッファローマンやロビンマスクに限らず、多くの伝説超人たちも若い頃はそれなりに遊び歩いたものだった。訓練は厳しくするが、若い正義超人たちの夜遊びまでは厳しく制限しないというのがファクトリーの暗黙の校規のようだった。

しかし。ここ最近はほとんど毎晩のようにバカ丸出しでマスターが馴染みの店で飲み歩いているグループがいた。

「コラ〜みんなもっとガバガバいけ！　オレのジュースが飲めないってのか〜!?」

ウーロン茶をチビチビ飲んでいるセイウチンの肩を万太郎はバンバンと叩いた。

「万太郎さん、あんまり飲み過ぎないでくださいよ〜」

セイウチンはそう言いながらも、万太郎のグラスに〝万太郎カクテル〟を注いだ。ウイスキーボンボンとジンジャーエールとコーラとカルピスをゴチャ混ぜにした、万太郎がいつもリザ

ーブしているスペシャルジュースである。万太郎はウイスキーボンボンの酒臭い息をプンプン吐いて、マスクの上まで真っ赤に染めてすっかり出来上がってしまっていた。

一緒に来ていたキッドはジャージーミルクで割ったライトソーダを飲んでいる。いつもはゲームセンターなどでナンパした女の子を連れているのだが、今日は珍しくナンパに失敗したようで、いつもは飲まない炭酸飲料を飲んでいた。

キッドはほんのり紅潮した顔を冷ますように、グラスを額に当てながら言った。

「おいおい万太郎、セイウチンには飲ませるなよ。この前、ウイスキーボンボンをペロッと舐めさせただけでひっくり返っちまっただろ」

「うるせっつーの！　今日はナンパ失敗したくせに！」

「ほっとけ！」

「たまにはいい気味だよっ、いつもいつも超カワイイ子を独り占めしてんだからっ！」

アルコールを摂ると、万太郎はまるで人が変わったように態度が大きくなる。成績ではまったく敵わない仲間たちを相手に好き放題なことを言っていた。

するとガゼルマンがポツリと呟いた。

「コイツ、大人になったら酒で友だちを無くすタイプだな」

「なんか言ったかガゼルマ〜ン!?」

「なーんにも」

そう返してガゼルマンは涼しい顔でミネラルウォーターを飲んだ。

ガゼルマンは万太郎たちと最近仲良くなった。鋭い二本の角と万太郎に負けない均整のとれた筋肉ボディが美しい正義超人である。ムダの無い動きと天性の勝負勘、そして歴代超人の中でも最高の跳躍力を誇る足腰の強さはまさに大地を駆けるガゼルのようだ。またシャープな顔に切れ長の瞳で、キッド同様に歓楽街の若い女の子たちに人気がある。

頭も良く、筆記試験も申し分ない。成績はいまのところファクトリーの中でトップの優等生だった。クールで、冷静で、どんなトレーニングにも決してネをあげない。まるで万太郎の正反対の優秀な正義超人だ。

しかしどういうわけか、ガゼルマンは万太郎とは気が合った。その原因は本人たちにもわかっていない。そこでセイウチンが訊いた。

「でも不思議ですね」

「なにが？」

「なんでガゼルマンさん、万太郎さんと一緒に遊ぶようになったんでしょう？」

万太郎とガゼルマンはキョトンと顔を合わせた。

「そーいや…なんでだろ？」

そこでキッドが言った。
「お互いに無いものを持ってるからじゃないのか？　それで、正反対の性格なのに仲良くなったコンビもあるって話だぜ」
「ん～…そんなもんかな。でも僕らのお互いに無いものってなんだ？」
「ガゼルマンのツノと、万太郎のマスクじゃないか」
ガゼルマンはブーッとミネラルウォーターを吹き出した。
「こっ、こんなブサイクなブタマスク！　俺は絶対いらないぜ！」
「オレだってこんなヤツの気色悪い お飾りツノなんていらないよっ！」
そう言ってふたりは「なんだと——!!」と摑み合いになった。
しかしとっくみあいではガゼルマンにかなうはずがない。万太郎はあっという間にズボンを引きずり下ろされ、パンツもはぎ取られた。そしてガゼルマンにハシを尻につっこまれて「ヒイイ～」と悲鳴をあげた。それを見てキッドは腹を抱えてゲラゲラ笑っている。セイウチンもケラケラ笑いながらケンカを見ていた。
その時、居酒屋の雰囲気がガラリと変わった。何か不気味な空気をまとった男が入店してきたのだ。
「いらっしゃいませ。おひとりですか？」

若い女の子の店員が声をかけても、その男は無視して万太郎たちの席にやって来た。

キッドが先に声をかけた。

「お前、確かEクラスのスパイダーじゃないか」

スパイダーは返事をせず、呟くように言った。

「4人ともここで飲んでたか。探しあてるのに苦労したよ」

スパイダーは断ることなく、万太郎の真向かい席にドカッと座った。

万太郎は全裸の股間にオシボリを置いて隠して、酒臭い息を吐きながら呑気に言った。

「ぷはぁ〜。スパイダー、お前も一緒に飲むか？」

「お前が万太郎、か」

その時、キッドは引っかかるものを感じた。

（コイツ…万太郎の顔を知らないみたいだ…？）

万太郎はある意味で有名人である。あの高名な伝説超人キン肉マンの息子だが、ファクトリーでの成績はいつも最下位。正義超人たちはAからJまで10クラスに分けられていて、万太郎は最下のJクラスのさらにビリ。なのに成績上位の正義超人たちから一目置かれる不思議な魅力を持っている。クラスが違うとはいえスパイダーも万太郎の顔は知っていたはずだし、クラス対抗スパーリングで何度か戦ってさえいる。

一緒に飲んだりする仲ではなかったが…知らないはずはない。

妙な雰囲気を感じて、キッドが先に訊いた。

「何しに来た？」

「そう冷たくするな。ランクは違うが、たまにはグラスを合わせて同窓の仲間とざっくばらんに話したい気分になったっていいだろう？」

そう言ってスパイダーは長い髪をかきあげた。白目の多い目がギロリと光っていた。

店内は寒くないのに黒いコートを脱ごうともしない。明らかに、昼間までのスパイダーとは雰囲気が違っている。キッドは警戒を解こうとしないでいた。

スパイダーは注文をとりにきた店員をシッと追い払って言った。

「夜の飲食はよくない。格闘家の筋肉に必要なクレアチンとアミノ酸が壊れる原因になる。そのぐらい地球行きを目指してる優等生たちならわかるはずだが？」

「…………」

「そんなバッファローマン先生みたいなカタいこと言うなよ〜！　ガンガン飲もうぜ！」

そう言って万太郎はスパイダーにもグラスを渡した。

するとスパイダーはワザと床に落としてパリンと割った。キッドたちが血色ばんだ。

「きさま…！」

「だーっはっは！　スパイダーのヤツもう酔ってるぜハハハハハ！」
完全に酔っぱらっている万太郎は何が起きても動じなくなっている。
キッドはチッと舌打ちして、万太郎に耳打ちした。
「おい、アッチであの店員がお前を呼んでたぞ。…ここだけの話、あのコは万太郎のファンらしいぜ」
「まっ…マジ!?」
キッドの指さす先には、ショートカットの可愛い店員の女の子が厨房に消えていった。
万太郎はムフーと鼻息を吐いてそそくさとパンツを穿いた。
「じ、じゃあちょっとご期待にこたえてくるねっ」
そう言って万太郎は宴の座から離れた。
そうしてスパイダーをキッドとセイウチンとガゼルマンが囲む形になった。キッドは低い声で訊いた。
「目的はよくわからんが、俺たちに話があって来たんだろ？」
「フン。さすがAクラスメンバーさんは察しが鋭い」
「…もったいつけるな。さっさと言え」
ガゼルマンが先を促した。実力者3人が相手である。ヘタなケンカに持ち込むつもりは無い

が、スパイダーはひるまずに言った。
「お前たちに宣戦布告ってヤツをね」
「なんだと？」
「お調子者のボンクラを大将にして、遊び歩いてる奴らを見ると気分が悪いんだ」
「…てめえ！」
キッドがスパイダーにつかみかかった。
その時、スパイダーはブッと唾を吐いた。それは長い糸となった。
「ぐわっ…!?」
糸がキッドの腕に絡みつき、ギリギリと腕を絞め上げた。スパイダーが不敵に呟いた。
「ククク…動くと折れるぞ」
「キッド！　くそっ、放せっ！」
慌ててガゼルマンとセイウチンが解こうとするが、粘つくだけで糸はキッドの腕にからまったまま解けない。
スパイダーはニヤッと笑って牙で糸をプツンと切った。キッドが床に倒れこむ。その様子を見下すように、スパイダーが冷然と言った。
「よく聞け。私は正義超人が宇宙で最も強いと思っている。人間を守るためじゃなく、私たち

正義超人の強さを証明するために、地球でのさばってる悪行超人どもを全滅しに行きたいんだ。おそらくお前たちとは考え方が違う」

「…………」

「それだけを言いに来た。覚えておけ。私は絶対、ファクトリーをトップで卒業して地球へ行く。邪魔する奴は全力で叩きつぶす」

セイウチンがギリッとスパイダーをにらんだ。スパイダーはまったく動じず言った。

「お前たちが私の手下に入るというなら歓迎するがな」

「…格下クラスの分際で、大層な口をききやがるじゃねぇか」

「いい気になるな。Aクラスぐらいすぐに入ってやるさ」

キッドの腕がまだキリキリと痛い。キッドは正直、驚きを隠せなかった。

（こいつにこんな糸攻撃があったなんて…本当にあのEクラスのスパイダーか…？）

ガゼルマンがキッドをかばいながらスパイダーに言った。

「ファクトリーで覚えてろよ、スパイダー」

スパイダーは無視するように、そそくさと帰り支度を始めた。

そして言い放った。

「言っとくが私の本当の標的はお前らなどではない」

「なんだと…？」
「私が気になるのは、女の尻を追っかけるのが大好きなブタさ」
スパイダーはニヤリと笑った。
キッドたちがハッと厨房の方を見た。万太郎が消えている。
「…万太郎！」
すると、万太郎の悲鳴が聞こえた。
「ぎゃあ～～～～！」
その途端、かき消すようにスパイダーも姿を消した。キッドたちは慌てて厨房に向かって走った。
「万太郎！　どこだ！　万太郎!?」
「折れる折れる、キッド！　セイウチン！　ガゼルマーン！　助けて～～～～～！」
悲鳴は冷蔵庫の陰から聞こえていた。
「万太郎っ!?」
キッドたちが駆け寄ると――。
「た、助けて…ギブアップ…」
万太郎は店員の女の子に、みごとなワキ固めをかけられていた。

「この気持ち悪いブタみたいな子、何にも言わないでお尻に触ってきたのよ！」
「だってキッドが、君から声をかけたって…」
「なワケないでしょ！　うりゃ！」
「ギャ――――！」
万太郎の腕はさらにキメられた。ちなみにレッスル星の女性のほとんどは超人で、並の男より強いのである。
女の子に組み敷かれて悲鳴をあげているパンツ一丁姿の万太郎――。
（コイツがスパイダーの標的だってのか…？）
キッドたちは深いため息をついた。
その日を境にファクトリーを包む静かな夜は終わった。

ヘラクレス・ファクトリーあげての筋肉トレーニングトライアルが行われた。レスラーの腕立て伏せ、足と腕を大きく広げたレスリングスタイル・プッシュアップの無限カウントである。
教官が止めるまで、何時間でもプッシュアップを行う地獄のトレーニングだ。

このトライアルは正義超人たちのランク別のクラス分けも兼ねていた。AからJまでランクを区分けすることで、プライドの高い若い正義超人たちの競争心をあおる目的がある。

全校生徒の正義超人たちがグラウンドに勢ぞろいした。それぞれ仲間同士でグループを組んで、各自ストレッチを行っていた。

万太郎の周りにはキッド、セイウチン、ガゼルマンが集まっている。キッドが背中を押して万太郎のストレッチを手伝っていた。

「ほら息を吐けよ万太郎、しっかり」

「う〜、いでででで！」

「頑張って、万太郎さん」

万太郎は身体が固い。特に股関節とヒザと肩関節が固いようだ。筋肉の厚さは申し分ないのだが、ケガを防ぐためとスピーディな動きに必要な柔軟性が足りなかった。

その隣でBクラスの正義超人ジ・アダムスが指さした。

「ほら。ああするんだよ万太郎くん」

アダムスの指す先ではスペシャルマンJr.とカナディアンボーイがふたり組んで見事な開脚柔軟を見せていた。ふたりとも伝説超人の父を持ち、万太郎とキッドと同じ二世超人である。アダムスもスペシャルマンJr.もカナディアンボーイも、成績は上位だがやはり万太郎と仲がよか

った。

「そんなこと言っても…ダメだぁ」

万太郎は背中を押していたキッドをバッとはねのけるように、地面に大の字になった。

「痛たた、無茶しないでよキッド。昨日女の子にキメられた肩がまだ痛いんだから」

「だらしねぇな。それでも正義超人か？」

その時、万太郎たちの前に何人かのグループが現れた。

同期の正義超人のひとり、マグネットンがからかうように言った。

「また優等生たちが成績ビリの万太郎のご機嫌を伺ってるぜ。胸クソ悪い光景だなぁ」

そのグループの先頭にはコートを脱いだスパイダーがいた。

風になびく長い黒髪と、全身を覆う起毛タイプの黒いボディスーツが不気味である。背は2メートルを越す長身だが、腕も足も細く華奢な身体である。しかし痩せているのではなく、引き締まった筋肉に全身が包まれている。どっしりした万太郎とは正反対の身体だ。

スパイダーは6人の正義超人を手下のように連れていた。バーバリアン、ジャイロ、ゴージャスマン、アポロンマン、ナムルとマグネットンである。いずれも成績優秀な卒業有力候補のメンバーだ。

特にマグネットンは格闘術だけでなく、両腕のＳＮ磁石と頭のコイル部分を使った磁力パワ

ーを使ったファイトスタイルで他の正義超人たちから恐れられていた。
その実力者たちが一様に、スパイダーの後ろに立っている。口は開かないが万太郎たちに威圧感を与えていた。
緊張して身構えるキッドたちとは反対に万太郎はケロッとして言った。
「スパイダー、昨日の夜は先に帰っちゃったみたいだね？　また今度一緒に飲みに行こうよ」
スパイダー以外のメンバーがみんなカクッとなった。
するとマグネットンがまくしたてた。
「こっ、こんな呑気なヤツを親分にするなんてキッドもガゼルマンもセイウチンも先が見えてるなぁ！　早くスパイダー様に乗り換えた方がいいんじゃねぇか？」
同じ正義超人をサマづけするなんて…どうやら一晩でスパイダーはマグネットンたちを「シメ」てしまったようだ。スパイダーがどれほど強いかは、キッドたちが推理する必要もなかった。
キッドが何か言い返す前に、万太郎が平然と言った。
「ボクは親分なんかじゃない。キッドたちは仲間だ。親分とか子分とか、そーいう考え方ってカッコ悪いよ」
「な、なんだと」

「それとも親分が欲しくてファクトリーに入ったの？」
マグネットンはグッと黙った。痛いところをつかれたようだ。頭はバカっぽいのに、万太郎はごくたまに正論を言うのだ。キッドはニッと笑った。
しかしマグネットンは振り払うように言い返した。
「じ、柔軟もロクにできねえヤツがキッドとかガゼルマンとつるんでんのがスパイダー様は気にいらねえって言ってんだよ！」
「なんだそれ～？　いいよ、だったらスパイダーもボクたちと一緒に練習しようよ」
万太郎がまねいた手に、スパイダーはブッと唾を吐きかけた。
すると腕を包むようにベトベトの糸がからまった。
「わっ！　うわっ!?　なんだコレ!?」
「万太郎!?」
キッドたちが慌てて糸を引き剝がそうとしたが、それが簡単に取れないことをキッドは知っていた。バタバタ騒いでいる万太郎を見下ろして、スパイダーは呟いた。
「お前の身体はムダな筋肉が多すぎる」
「…なっ、なに？」
「前腕や上腕は発達しているが筋肉が全体に身体のセンターに寄り過ぎだ。腹筋は太いが横の

広さが足りない。三角筋と広背筋にまとわりついている脂肪は、肩甲骨から肩の関節の固さの原因になる。臀筋も安定していないから股関節が支えきれていない」

スパイダーの言うことはすべて当たっていた。万太郎の身体には、動きを制約する筋肉が多かった。筋肉バカのように身体を鍛えている正義超人が多いなか、スパイダーは非常に知的な筋肉をつけていた。ムダを省き、細くはあっても重量がないぶん柔軟性が高い。また腕や足が細いと、チョークスリーパーホールドやレッグロックなど関節技に有利だ。

ブクブクと身体を筋肉で大きくするより、絞りあげた筋肉の身体が格闘家として理想的である。かつて史上最強への最短距離にいると言われた全盛期のアントニオ猪木や、国内では敵無しだった時代の小川直也が、しっかり鍛えてはいてもシャープなボディなのはその証拠である。

スパイダーは赤い目をギラリと光らせた。

「つまり炭酸飲料と動物性脂肪の摂りすぎだ。柔軟力が無いのは当然だ。お前なんぞに私たちと競うトライアルに出る資格は無い」

キッドは静かに語るスパイダーを見ながら思った。

(コイツ…強いだけじゃない。頭もキレる…)

たった一晩なのに、Eクラスのスパイダーへの見る目が完全に変わっていた。

その時、教官のバッファローマンの大声が響いた。
「みんな準備はいいかー！　トライアルを始めるぞ！」
「えっ…でもっ！」
万太郎の腕からはまだ糸が外れていない。スパイダーたちは何事も無いように去ってしまった。どうやら万太郎を邪魔するのが目的だったようだ。
万太郎はもがきながら言った。
「いいよキッド、セイウチン、ガゼルマンッ。トライアルを始めて！」
「でも…万太郎さんっ」
「ボクは自分でなんとかするから」
そしてバッファローマンの大声が響いた。
「ではスタート！　イーチ！　…ニー!!」
トライアルが開始された。バッファローマンのカウントに合わせて、正義超人たちがプッシュアップを始める。セイウチンは万太郎を気にしながらもプッシュアップを続けた。
教官たちの厳しい監視の中、黙々とプッシュアップが続く。
1時間が経つと半分の正義超人が脱落した。2時間したらさらに半分。5時間後にはさらにその半分…その頃にはプッシュアップのカウントは2万回近くになっていた。

そして6時間後、残っていた正義超人は4人だけだった。
キッド。ガゼルマン。セイウチン。そしてスパイダー――。
バッファローマンはトライアルの終了を告げ、スパイダーに言った。
「よくやったスパイダー。お前は今日からEクラスからAに移らせる」
スパイダーは返事をしないで、ただ小さくクールにお辞儀をした。
驚いたのはキッドたちだ。いつもならほぼキッドたち3人しか残っていないはずなのに、EクラスのスパイダーがいつのまにかAクラスの体力をつけていたとは。それに自分たちは汗ぐっしょりなのにスパイダーはほとんど息も上がっていない。
スパイダーはキッドを見て、冷たく笑ってみせた。
「これから同クラスだ、よろしく頼む…フフフ」
一方、万太郎は糸から抜け出せず、ついにはゴムマリのようにひとり関節技のような体勢になって医務室へ運ばれていた。
プッシュアップのカウントはもちろんゼロ。またもや最下位決定である。

それから一カ月が過ぎた。

成績のトップグループはキッド、セイウチン、ガゼルマンにスパイダーが加わる形になった。同時にスパイダーは自分の手下を着々と増やしていた。

キッドのように熱くはならず、ガゼルマンのように紳士的ではなく、セイウチンのように情にもろくはない。常に冷静でクール。キレる頭脳。孤高のカリスマ性に惹かれた正義超人たちはみんなスパイダーの軍門に入った。

スパイダーは容赦なかった。スパーリングでは相手を死ぬまで痛めつけ、トレーニングでは仲間をも踏み台にする。スパイダーのせいで何人もの超人が再起不能になりファクトリーを去ったというのに、彼にはどんな手段をもっても抗えない悪魔的な強さがあった。

「強さこそ正義。強くなかったら悪行超人に立ち向かえない」

「弱者は切り捨てる。すがる者は、それだけですでに悪だ」

「強い者こそすべての救済者である」

「私たちは必ず勝つ。邪魔する奴は皆殺しだ」

スパイダーのクールな言動は、血の気の多いタイプの正義超人たちを酔わせた。

そしてついにファクトリー内にスパイダーの一大派閥が形成されていた。

スパイダー派閥の正義超人たちはまるで彼を教祖のように崇め、自分たちを〝革命軍〟と呼んだ。革命軍は団結を強め、ファクトリー内で特異な雰囲気を放っていた。

一方。革命軍とは一切関わらずマイペースでトレーニングに励むグループがあった。万太郎たちだ。

万太郎を筆頭にキッド、ガゼルマン、セイウチン、そしてジ・アダムスやスペシャルマンJr.にカナディアンボーイほか比較的穏やかな性格のグループである。誰から呼ぶともなく、万太郎たちのグループは〝正規軍〟と呼ばれた。

こうしてファクトリーは二大勢力に分断された。

ある日の午後、ファクトリーの食堂でカルビ丼の超大盛りを食べながら万太郎は言った。

「なんか最近スパイダーのヤツら怖いよね～。どこか冷たくってさ、近くを通っただけでブルブルッてしちゃうよ。特にスパイダー、あいつ一カ月ぐらい前から何か急に雰囲気変わったよね？」

「そうだな」

万太郎の隣にキッドとガゼルマンとセイウチンが座っている。キッドが言った。

「万太郎、いまはあんまりひとりになるなよ」

「え、なんで？」

万太郎は口の周りにゴハンツブをいっぱいくっつけてキッドにそう訊いた。

「特に理由は無いけど…まあとにかく、俺たちと一緒にいろ」
スパイダーの狙いは万太郎のようだった。この短期間のうちにあの手この手で、革命軍は万太郎のトレーニングを邪魔してきた。万太郎を一日も早くファクトリーから脱落させたいようだ。しかし邪魔されるたび、キッドとセイウチンとガゼルマンが巧妙にガードしてきた。
スパイダーが万太郎を狙う目的は今ははっきりとはわからない。それがキッドには余計に不気味だった。
（とにかく万太郎をひとりで歩かせるのは危険だ）
その思いはセイウチンもガゼルマンも同じだ。最近はそれとなく、3人は万太郎について歩くようになっていた。
「なんだよー、教えてよ。ボクだけ何も知らないみたいで気分よくないよ」
「お前は何も知らないでいい」
「そうそう、まず成績を少しでも上げることを気にすることだな」
万太郎はブーッとふくれてカルビ丼をかきこんだ。
すると食堂にマグネットンが現れた。食堂の中の空気が変わった。
マグネットンはいまや革命軍の副将軍のようにふるまっていて、派閥の中でかなりの力を持っていた。そのまま肩を揺らせて、万太郎たちの席に歩いてきた。

「ようっ。くつろいでるか？」

キッド、セイウチン、ガゼルマンが立ち上がった。万太郎が「なに？　なに？」とキョロキョロする。するとマグネットンがサラリと言った。

「おーっと、別にケンカしに来たんじゃねぇ。落ちつきな、伝言がふたつあるだけだ」

「…なんだ」

「ひとつは今度の公開スパーリングセミナー、俺と万太郎がやることになった」

「なんだとっ!!」

公開スパーリングセミナーとは、選ばれたふたりの正義超人がリング上で戦い、ほかの正義超人たちが試合内容のレクチャーを教官から受ける講習だ。

しかし講習とはいえ、試合は悪行超人との本番同様ガチンコである。この講習で大ケガを負って脱落していった正義超人も少なくない。

キッドは革命軍の正義超人と万太郎とを戦わせたくなかった。どんな手が使われるかわからないからだ。しかし今回はおそらくスパイダーが仲間を使って選出に何かの手を加えたのだろう。

これで万太郎ひとりがリング上で革命軍と戦わなくてはならなくなった。それも実力者、マグネットン相手に。

万太郎は悲鳴のような声をあげた。
「ひ――――！　ボクがマグネットンと!?　そんな無茶な～！」
するとマグネットンがキッパリ言った。
「ピーピーうるせえ、決まりは決まりだ」
万太郎は小さくなってしまった。そしてマグネットンはキッドを見て言った。
「ふたつ目の伝言はキッド、お前にだ。スパイダー様が会いたがってる」
「…俺に？」
「後で第3会議室に来い。じゃあな」
それだけ言って、マグネットンは万太郎をギッとにらんだ。万太郎はヒョッと縮み上がった。マグネットンはフフンと笑って去って行った。
キッドにガゼルマンとセイウチンが話しかける。
「キッド…スパイダーの奴」
「絶対何か考えてますよ、気をつけて」
「…大丈夫、気は緩めないさ」
キッドはサスペンダーを締めなおして言った。
「告白タイムってワケじゃなさそうだからな」

第3会議室にはジャイロ、バーバリアン、ゴージャスマン、アポロンマン、ナムル、マグネットンが立っていた。その輪の中心にスパイダーが座っていた。

キッドが入って来ると、会議室の空気がピーンと張り詰めた。

ゴージャスマンが訊いた。

「キッドひとりか？」

「当たり前だ。俺はお前らみたいに誰かと一緒じゃないと何も出来ないチキンどもとは違う」

キッドの挑発にゴージャスマンは乗らなかった。

「俺たちはスパイダーの言ってることが正しいと思っている。だから従っているだけだ。親分子分なんていう小さいこだわりで、こうしてるんじゃない」

「………」

「俺たちは地球に行って悪行超人を倒したい。そのための最短距離をスパイダーは知っている。だから従っているだけだ」

「まあそれぐらいにしておけゴージャスマン」

そう言ってスパイダーはゴージャスマンを制した。そして静かに言った。

「みんな席をはずしてくれ。キッドとふたりで話したい」

マグネットンは不服そうだったが、全員その言葉に従って出ていった。

キッドはドカッとスパイダーの真正面のイスに足を上げて座った。

「ずいぶん教育が行き届いてるな。ゴージャスマンは、前はあんなペラペラしゃべる奴じゃなかったぜ」

「みんな真面目(まじめ)なのさ。正義に燃え、24時間地球を救うことだけ考えてトレーニングしている…きっと素晴らしい正義超人になるよ」

キッドはスパイダーのどこか皮肉めいた言い方が気に食わなかった。

「まさかお仲間自慢したくて呼び出したワケじゃねえだろ？　さっさと用件を言いな」

最初にキッドが切り出した。するとスパイダーが言った。

「そう固くなるな。難しい話じゃない」

キッドは顔は平静を装っていたが、心の中はスパイダーへの警戒心で一杯だった。本心をあっさり見透かされたようで、キッドは聞かれないように生唾(なまつば)を飲んだ。

するとスパイダーが優しく言った。

「用件はひとつ。キッドに我が革命軍に来てほしい」

キッドはピクッと眉(まゆ)を上げた。そして長い沈黙が訪れた。

先に口を開いたのはキッドだった。

「人は足りてるだろ？　俺なんか入れてどうする」
「そういう問題じゃない。お前は組織というものをわかっていない。いいか、組織こそ力だ。ここにいる教官たちはバカだ。卒業して地球に赴任できるのなんてせいぜい10人だっていう…たった10人で悪行超人と戦えるはずがないだろう？」
「パパたちはそうやって戦った」
スパイダーは冷然と続けた。
「時代が違う。冷静に考えろ。個性的な正義超人はいらないんだ。私たちが団結して、それぞれが力を伸ばして教官たちを突き動かし、実力者を出来る限り多く卒業までこぎつけさせる。それには我々新世代の正義超人たちの組織を強くしなければならない…どうしてもお前の力が必要だ」
ファクトリー内でのキッドのポジションは重要だった。伝説超人を父に持ち、派手さはないが堅実な戦法を使い、勇気と負けん気は誰より強い。なにより正義超人の中で最も戦いへの〝熱〟を持っている。誰からも一目置かれた特別な存在とされている。
そのキッドが動く、ということは多くの正義超人たち、特に正規軍の総意も含まれるのだ。
キッドは表情を変えないで言った。
「口のうまい奴だ。一カ月で革命軍の親分に成り上がれるわけだ」

スパイダーはその挑発にもこたえなかった。

「茶化すなキッド、友情やら努力やらお仲間ゴッコの時代は終わりだ。かといってお互いの足を引っ張り合う駆け引き合戦をやっても仕方ない。いま我々に必要なのは、伝説超人を越えるに足りる革命軍の軍団化だ」

「軍だと？」

「そう、我々はチームではない。仲間でもない。軍だ。情よりも規律が重き最強の組織を編成する。それこそ悪行超人を全滅させるための最も優れた手段となる」

「…………」

「絵空事ではない。人選も私なりに考えているのだ」

「わかったわかった」

キッドは両手の手のひらを前に出してスパイダーの言葉をさえぎった。

「早い話、俺にそっちの仲間になれってことだろ」

「我々が悪行超人に勝つためだ。そのためには弱い者を切り落とすべきだ」

「万太郎のことか？」

スパイダーは黙った。

「なぜあいつをそんなに落としたがるんだ」

「…もう一度言う。戦いに弱い奴はいらないんだ。お前は私と組むのが最良だ」
すかさずキッドが言った。
「その言い方、俺にはお前が万太郎を怖がってるようにしか聞こえないぜ」
鉄面皮のようだったスパイダーの細い目が、わずかにピクついた。
するとキッドは立ち上がった。
「用件がそれだけなら帰らせてもらう。ま、そっちはそっちで楽しくやりな。俺は関係ないものと思ってくれ。たぶんセイウチンもガゼルマンもそう言うぜ」
スパイダーは、脅すように低く訊いた。
「…テリー・ザ・キッド。ひとつ教えろ。貴様ほどの実力者がなぜ万太郎などの味方につくのだ？」
その言い方に激しい敵意が込められている。キッドの緊張が高くなる。
しかし今は一戦を交える場ではないことはわかっていた。
代わりにキッドはニヤッと笑いながら答えた。
「あいつはドジでマヌケでどうしようもない奴だからだ」
スパイダーの眉間に皺が寄った。それは「理解できない」という証だった。
「…革命軍として戦えば、正義超人として充実した生活ができるのだぞ」

「俺は万太郎と一緒にいる方が充実してるぜ」
そう言い捨てて、キッドは出ていった。
スパイダーはひとり残った会議室で、忌ま忌ましそうに呟いた。
「やはり……ここを牛耳るには万太郎の首を取るしかないか……!!」
唇から巨大なキバがバックリと口を開いた。

第3章 万太郎、追放!?



公開スパーリングセミナーは第1格技場で行われた。
格技場には受講する正義超人たちとスパーリング選手が集まっている。
選手は万太郎とマグネットン。
Jクラス超人とBクラス超人の、クラスの違いすぎる異例の対決である。
公開スパーリングは特設リングで行われる。一見すると普通のリングだが、リングフロアに中敷きは無い。コーナーポストにもガードクッションは無い。ロープのかわりに鉄棒が張られている。つまりそこは全面鋼鉄性の超硬度リングなのだ。身体を打ちつけられれば大ケガは必至である。超人専用の特別リングだ。
赤コーナーに万太郎、青コーナーにマグネットンが立っていた。
それぞれセコンドにキッド、ガゼルマン、セイウチンとスパイダー、ゴージャスマン、ジャイロを従えている。
選手ふたりの様子は対照的だった。マグネットンは軽く首や足首を回してリラックスしているのに対し、万太郎は背中を丸めてコーナーポストに手をついたままだ。心なしか震えているようにも見えた。キッドが声をかけた。
「しっかりしろ、万太郎っ」
「だって…マグネットンに勝てるはずないよ。きっとみんなの前でボコボコにされちゃうん

だ〜、怖いよ〜」

まるで子供のようだ。と言っても実際の14歳の少年らしいと言えばそれまでだが。

その時、教官のロビンマスクが声をかけた。

「それでは両選手、準備はいいか!!」

マグネットンが答えた。

「もちろんです!! 万太郎をブッ潰してやる！」

するとリングサイドに集まった正義超人たちからどよめきが起きた。正規軍の万太郎と革命軍のマグネットン——見ている方も、この対戦が授業を越えた戦いであることをわかっていた。

ロビンマスクがゴングの前で槌を振り上げた。

「ふたりともコーナーについて！　レディ、ゴ————ッ!!」

カ————ン！

ゴングの甲高い音が格技場にとどろいた。

「ケケケケケケケ〜〜〜〜〜〜〜！」

「うわぁ————！」

ゴングと同時に、マグネットンが猛然と万太郎にタックルしてきた。

あっさり万太郎はリングに背中から叩きつけられる。
バァァアン――鉄のフロアの鈍い音が響いた。
万太郎の全身に車が激突したような衝撃が走った。
「ぐぅわ……！」
「そりゃそりゃや～～～～～～！」
マグネットンが一気に転がっている万太郎の足をとり、右足を曲げて両足と股でロックした。そして万太郎の身体と直角の位置に体重をかけて倒れた。
「ギャ――――！」
万太郎の悲鳴がつんざいた。変形足四の字固めだ。マグネットンだけでなく革命軍はみんな、大将のスパイダーが直伝した高度な関節技の名手だった。
万太郎はジタバタするだけでロックをはずせない。苦しそうに顔をかきむしる。
「もうギブアップか万太郎!?　キハハハハハハ！」
万太郎の伸びている方の足を、マグネットンは絶妙に自分の胸の方向に絞り上げる。
「万太郎！　ロープだ！　ロープをつかめ！」
キッドは大声でアドバイスした。万太郎は正規軍のシンボルである。負けてもらうわけにはいかなかった。キッドはなんとかマグネットンの攻略方法を考えた。

しかしどう考えてもマグネットンの方が格上である。どうすればいい――？
「くく…くっそ～～～～～！」
万太郎はなんとか、背筋と腕の力だけでジリッジリッと鉄棒ロープに近寄った。足は完全にロックされているが鍛えられた上半身が万太郎を助けた。また万太郎の身長は176センチで、体重83キロ、かたやマグネットンは身長は172センチで体重79キロ、わずかな体格差が万太郎に有利だったようだ。
そしてなんとか万太郎は鉄棒ロープをつかんだ。ロープブレイクである。するとマグネットンは正義超人らしく足のロックをはずした。
「チッ…とっとと起きろ！　万太郎！」
「うわわっ！」
そのままマグネットンは万太郎の頭をつかみ、後ろから細い腕をスルリと首に巻いた。スリーパーホールドだ。首の関節と肩口の筋を同時に絞め上げる。
「…ウググッ！」
万太郎の顔がみるみる紅潮してゆく。キッドが叫ぶ。
「早く外せ！」
万太郎がマグネットンの腕を掴む。わずかだが、腕力だけなら万太郎の方が上だ。

「そうはいくか！」
するると突然、マグネットンの頭部のコイル部分が高速回転した。
ブゥ――――ンという音を放ち、万太郎の頭をホールドするマグネットンの両腕のS極とN極がガチンと強く接着した。
マグネットンは頭のコイル部分を回転させることで、全身の電磁パワーを操って攻撃できるのだ。磁力で強くくっついたマグネットンの両腕は万太郎の腕力でもビクとも離れない。万太郎の顔がどんどん紅潮してゆく。これが青ざめると、血流も呼吸も止まった危険な状況なのだ。
「マグネットン、行け〰〰〰〰！」
革命軍は興奮してマグネットンに声援をおくった。スパイダーはピクリとも表情を変えないで試合を見ていた。
マグネットンは薄ら笑いながら言った。
「どうした万太郎〜！　正規軍なんて所詮こんなものかよ！」
すると苦しんでいた万太郎の目つきが変わった。
「…ボクはいいけど仲間をバカにするのは…！」
「…ぬっ…？」

「許さない〰〰〰！」
　万太郎は頭をホールドされたまま、力任せに立ち上がった。そして接着している腕を軸に、柔道のはね上げの要領でマグネットンをロープにぶん投げた。
　ガチィィン！　マグネットンの身体が鉄棒に打ちつけられる。
「グァッ…！」
「うりゃ―――！」
　万太郎がショルダータックルでロープ際にいるマグネットンに向かった。
　するとマグネットンの頭が高速回転した。マグネットンは足にも磁力を伝わらせ、身体を横にしたまま鉄のロープを走り抜けた。
　突っ込んできた万太郎はそのまま鉄棒に激突した。
「うあっ…！」
　マグネットンはロープから軽やかに側宙でリングの中央に降り立った。
　キッドが応援の声をあげる。
「万太郎！　体格では勝ってるんだ！　どんどんボディアタックをしかけろ！」
　万太郎は立ち上がり、再びマグネットンに突進した。そして股の下に腕を入れ、肩口をつかんだ。ボディスラムの体勢だ。だが、マグネットンの身体はビクとも動かない。

「あ、あれっ？」
マグネットンの頭がブゥゥンと回転したままだ。鉄のフロアに足の裏が磁力で接着しているのだ。
「バカめ！」
そしてマグネットンは万太郎の肩に肘鉄を下ろした。万太郎の骨がボキリと鳴った。
「うぐぁっ…！」
肩の骨にヒビが入ったようだ。うずくまったところにマグネットンの足が飛んできて、万太郎は吹っ飛んだ。
「うわぁあ！」
ズ――――ン！　万太郎が倒れたところに、マグネットンは宙返りしてボディプレスを見舞った。
「ぐぅうう…っ！」
「キハハハハ！　どうだ万太郎！」
青コーナーのセコンドのゴージャスマンとジャイロ、革命軍たちから歓声があがった。強い――セコンドのキッドは心底そう思った。さすがは革命軍の副リーダーだ。もし万太郎が敗れれば、正規軍は革命軍より格下とみなされる。

　そうなると、いまは仲間の正義超人たちが正規軍から離れていくことがありえる。多くの仲間の支持を勝ちとることも戦いには必要なのだ。
　地球で悪行超人と戦うため、正規軍は負けるわけにはいかなかった。
　フォールされている万太郎を、キッドとセイウチンとガゼルマンはリングを叩いて奮わせた。
「万太郎――！」
「万太郎さーん！」
「万太郎――！　立て――！　立つんだー！」
　しかし万太郎のダメージは大きかった。肩の痛みのせいで、マグネットンの身体の重さが何百キロに感じた。
（ダメだ…こんな相手に勝てない）
　マグネットンは万太郎の耳元で囁いた。
「万太郎、ゆっくりオネンネしな」
　万太郎の目の前でマグネットンの頭のコイルが高速回転した。腕と足に磁力を走らせ、鉄のフロアに接着することでフォール体勢を固めるつもりだ。
　万太郎は観念しかけた。

しかし、万太郎はマグネットンの回転するコイルを見て何かに気づいた。
(回転は右だけ…？)
万太郎はハッとなった。すると突然、万太郎の瞳に生気が宿った。
「…ボクはまだ負けないぞ～！」
万太郎はマグネットンの回転するコイルをガッと手でつかんだ。
ブスブスと手袋が擦り切れ、回転が止まる。そして力任せに左に回した。
「うっ…うおっ!?」
マグネットンの腕足の接着力が急速に弱くなった。すかさず万太郎はフォール体勢から脱出した。そのときスパイダーの眉がわずかに動いた。
万太郎は立ち上がった。肩を押さえてはいるが生気が蘇っている。キッドが赤コーナーから叫んだ。
「何をした、万太郎!?」
すると万太郎が言った。
「あのコイルだよ！　マグネットンの頭のコイルは右回転で磁力アップ、左回転で磁力ダウンする。つまりマグネットンの意思でなくてもボクでも操作できるんだ！」
マグネットンは動揺したように、万太郎に突進した。

「そ、それがわかったとてー！」

するとと万太郎はするりとマグネットンをかわし、背後にまわった。

「くらえマグネットン！」

背中合わせになり足を滑り込ませ、マグネットンの足を組ませた。そしてガッチリと首をホールド、万太郎は首をそのまま巨大な槌を振り下ろすようにヘソに向かって引いた。

逆エビ状態で弓なりになったマグネットンの身体――悲鳴がつんざいた。

「ギ、ギャア〰〰…!!」

万太郎のオリジナル・スペシャルホールドが完全にキマッた。

「マンタロースストレッチ――!!」

マグネットンの首をつかんだまま、万太郎はマグネットンの頭のコイルを右回転させた。マグネットンの身体の磁力が意思に反してどんどんアップする。マグネットンの身体は鉄のリングフロアにギリギリと吸いよせられた。キメられたマグネットンの身体はさらに弓なりにしなってゆく。メキメキ、ボキ…マグネットンの身体が枝を折るように鳴っている。

「ぐ…グギャ――！」

「どうだマグネットン！」

形勢逆転だ。どうあがいてもマグネットンの脱出は不可能だ。もがけばもがくほどマグネッ

トンはフロアに吸いよせられる。
しかし、マグネットンは激痛の中でおかしなことに気づいていた。
(ち、違う…俺の身体はフロアじゃなく…万太郎に吸いよせられている!?)
鉄のフロアではなく万太郎の身体に引っ張られている。
磁力パワーが、なぜ?
しかしどのみちマンタローストレッチの弓なり効果は変わらない。マグネットンの身体はさらに歪(いびつ)になってゆく。
万太郎は肩の激痛に耐え、必死にコイルを回し続けた。バキッ…ボキッ…マグネットンの身体が引力に負けて折れてゆく。
そしてついに、マグネットンが小さく呟(つぶや)いた。
「ぎ…ギブアップ…」
カンカンカ―――ン!!
ロビンマスクがゴングを鳴らした。
「試合終了〰〰!!」
勝負はついた。格下の万太郎の勝利、まさしく大逆転だ。
「やったぞ万太郎〰〰!」

「万太郎さーん！　カッコイイ〜〜〜〜〜！」

キッドたちは万太郎に駆け寄った。見ていた正義超人たちも、驚きと興奮の拍手と歓声を万太郎におくった。

キッドは万太郎に肩を貸した。かなり痛そうだ。

「大丈夫か万太郎、よくやったぞ」

「へへへ…偶然だよ」

偶然じゃない——万太郎には勝利を引き寄せる何か特別な力がある。

マグネットン相手なら、キッドやセイウチンやガゼルマンならもっと苦戦していたはずだ。

万太郎はやはり頼れる正規軍のシンボルだとキッドは思った。

そのとき、マグネットンの悲鳴が聞こえた。

「ぐぁあああ〜！　お、お許しくださいスパイダーさま…！」

見るとマグネットンがスパイダーにシメ上げられていた。チキンウィングフェースロックと羽根折りを合わせた複雑な関節技をかけられてる。そしてマグネットンの首がねじ切られようとしている。

スパイダーはマグネットンの命乞いを無視してさらに力を込めた。

「お前は革命軍の恥をさらした。死んで恥を償え」

スパイダーはまったく表情を変えない。リングで必死に戦った副リーダーを、労うどころかためらいなく切り捨てようとしている。

革命軍の正義超人たちは凍りついたように、残酷な断罪の儀式を見ていた。

すると万太郎がカットに入り、スパイダーの腕にしがみついた。

「やめろスパイダー！　マグネットンを放せ！」

万太郎は肩の痛みを忘れて必死にスパイダーの腕を引き剝がそうとした。スパイダーは冷たく言った。

「あっちへ行け万太郎。これは革命軍の中の問題だ」

「そんなの関係あるか！　試合の終わった仲間に手をかけるなんて、何を考えてる！」

「…こいつはもう仲間ではない」

「バカ言うな、正義超人はみんな仲間じゃないか！　勝手に上下関係をつけて、罰だとか恥だとか小さいことにこだわってどうすんだよ！　それでも正義超人か！」

キッドも静かに近づいて言った。

「万太郎の言う通りだぜスパイダー。マグネットンを放せ」

「貴様も邪魔するか」

「さもなきゃ今ここで俺たちの相手をすることになるぜ」

セイウチンとガゼルマンがズイッと身を乗り出した。
すると観客席のジ・アダムス、スペシャルマンJr.、カナディアンボーイら正規軍の正義超人たちもスックと立ち上がった。みんな鋭い視線をスパイダーに投げつけている。
スパイダーは静かにマグネットンを放した。マグネットンはズンと倒れた。
そしてスパイダーは万太郎に小さく言った。
「こんな三下相手に勝ったぐらいでいい気になるなよ」
そしてゴージャスマンとジャイロを引き連れて、スパイダーは立ち去って行った。
するといきなり万太郎は正規軍の正義超人たちに囲まれ、胴上げされた。
「のわ〜！　怖い高い怖い〜！」
「マンタ〜ロ！　マンタ〜ロ！」
胴上げしながらキッドは万太郎を褒めた。
「偉いぞ万太郎！　敵のマグネットンを助けるとはな、見直したぜ」
「え〜、だってマグネットンと友だちになっとけばいろいろ得がありそうじゃない？」
「なにっ…？」
「あの磁力パワーで壁を登って女の子の部屋に忍び込ませてもらったり、パチンコの玉を動かしてもらったり、肩コリを治してもらったり…とかさ」

万太郎はニヤニヤしながらそう言った。試合中にそんなコトを考えていたとは。冷静なんだかイヤらしいんだかただのバカなのか。

キッドは呆れるのと頭にくるのとで思わず怒鳴った。

「…このろくでなしが――!!」

正義超人たちが一斉に身体を引いた。すると胴上げで空を舞っていた万太郎が地面にバタンと落っこちた。

「イデ――ッ！　…ひ、ひど〜い、ケガしてるのに〜」

「お前なんか負けちまえばよかったんだ！」

「ムッカー！　何だよその言い方はっ、必死に戦ったのにー！」

そして万太郎とキッドはバカボコと殴り合いを始めた。「こらこら！」とガゼルマンとセイウチンが慌てて止めに入ったが、ケンカはなかなか収まらなかった。

正規軍の正義超人たちの笑い声が第1格技場に響く。その声をマグネットンは医務室に運ばれながら、ボンヤリと聞いていた。

万太郎の勝利で、正規軍の力は一気に盛り返していた。

同時に、スパイダーの万太郎への敵意は頂点に達していた。

成績最下位の万太郎を中心とした正規軍が、少しずつ革命軍を押しはじめた頃。
バッファローマンがファクトリーの全正義超人たちを講堂に集めた。
「今日は重大な報告がある。昨日、ファクトリーに匿名でこの文書が送られてきた」
壇上に立つバッファローマンの手に封書がある。バッファローマンは中を開け、手紙を読んだ。
「《ヘラクレス・ファクトリーに悪行超人が潜入の報有り。至急調査されたし》つまり悪行超人が生徒の誰かに成りすましているということだ」
正義超人たちがいっせいにザワついた。バッファローマンは話を続ける。
「この文書の送り主は不明だが地球から届いた。情報源としては信頼できよう。まだ未熟な君たちでは一線級の悪行超人とは戦えない。以前わがファクトリーを襲ったアナコンダの例もあることだし、君たちを疑うのは誠に遺憾だがいまここで検査を行いたいと思う」
正義超人たちが並んでいる中に万太郎もいる。ケガした肩はキン肉星人にふさわしい超人的な早さで回復して、骨はもうくっついていた。万太郎はキョトンと呟いた。
「検査って何だ？」
「全員の汗を採取する。そこで鉄分反応を調べようと思う」

正義超人と悪行超人とを識別できる方法は意外と少ない。悪行超人には人間への敵意や征服心があるだけで、身体構造や能力は正義超人とほぼ同じだからだ。

唯一確実な違いは正義超人のアイアン・スエット——かつて正義超人は鉄の鎧を身につけて戦った名残から汗に微量の鉄分が含まれる——だけである。

悪行超人にはアイアン・スエットは無い。かつて悪魔超人だったバッファローマンも、正義超人に転身した時にアイアン・スエットを持つ体質になったのだ。

問題はその汗の採取方法だ。万太郎はまた呟いた。

「汗を採取ってどうするんだろ？　サウナでも入れてくれるの？」

ザワつく正義超人たちに、バッファローマンは大声で言った。

「いまから各自にコップを渡す。そのコップを一時間以内に汗で満たすのだ！」

早い話が運動して汗をかけということだ。

正義超人たちから一斉にブーイングに似たどよめきが起こった。

「なんだよ〜、結局トレーニングじゃないか〜〜〜！」

バッファローマンは万太郎たちの声を無視して言った。

「それでは開始ー！　1分でも遅れたヤツは地下室に監禁する！」

正義超人たちはブツブツ言いながらプッシュアップや腹筋、スクワットを始めた。

万太郎だけ情けない声でボソリと訊いた。
「あの～、オシッコじゃダメですか？」
「ダメに決まっておるだろ～～～!!」

こうしてファクトリーにいるすべての正義超人の汗が集められた。
コップの数は200個。それぞれに正義超人の名前が書かれ、すべて保健医務室のテーブルに並べられている。ロビンマスクが指揮をとり医師たちが検査を行う準備をした。
「ではまずAクラスの正義超人から順番に…」
ロビンマスクが手順を説明している時。
テーブルの天井からツッと細い糸が落ちてきた。
糸はAクラスの1つのコップと、Jクラスの1つのコップを静かに入れ換えた。
その間はわずか1秒ほど。
ロビンマスクたちがテーブルを向き直ると、糸はプツンと切れてテーブルの下にハラリと落ちた。
音もなく天井裏を移動してゆく何者かの存在に全く気づかず、医師たちは検査を始めた。

その次の日。再び講堂に全正義超人たちが集められた。
壇上にバッファローマンが立つ。いつも以上に厳しい表情だった。ほかの教官たちもひどく緊張しているのがわかった。
「昨日の検査結果を報告する。汗にアイアン・スエット反応のまったく無い生徒が…ひとりだけいた」
一斉に正義超人たちがザワめいた。そんな中、万太郎だけが呑気に鼻をホジッていた。
「ふーん。こんな正義超人ばっかりの中で、勇気のある悪行超人がいたもんだね」
そしてまるで人ごとのように大あくびをした。
しかし、バッファローマンの次の言葉で講堂の空気が一瞬凍った。
「その男は…キン肉万太郎だ」
キッドが凍りついた。
セイウチンも、ガゼルマンも。
「まっ…万太郎…がっ!?」
「万太郎さんが…まさか!?」
正規軍の正義超人たちが一斉に万太郎を見た。
万太郎は鼻に指をつっこんだまま、間抜けな顔であくびの途中だった。

「あ〜あ…え、なに？　なに？　ゴメン、聞いてなかった」
するといつの間にか、スパイダーが万太郎のすぐ後ろに立っていた。
2メートルを優に越す長身から、スパイダーは万太郎を冷たく見下ろして言った。
「万太郎。お前が悪行超人だ」
「…えっ!!　ウソッ……!!」
スパイダーは万太郎の肩をつかんだ。
せっかく治りかけた傷に、スパイダーの指がギリギリと食いこんだ。
その力に容赦は無かった。

第4章

陰謀



ヘラクレス・ファクトリーに忍び込んだ悪行超人は万太郎だった。

アイアン・スエットの検査結果は正規軍だけではない、ファクトリーにいるすべての正義超人たちに衝撃が走った。

驚いたのは若い正義超人たちだけではない。

その報告はすぐにキン肉星にも伝えられた。いつも冷静なビビンバが、ひどく動揺していた。

「そんなハズ無いじゃない！　あの子は…私とキン肉マンの息子なのよ⁉」

衛星電話を握るビビンバの手がブルブルと震えていた。受話器の向こうで、ロビンマスクが沈痛な声で言った。

「わかっている…何かの間違いだとは思う。しかし、私が立ち会ったうえでの検査結果なんだ。間違いはありえない」

正義超人の証であるアイアン・スエットが万太郎には無かった。ファクトリーとしては、万太郎を正義超人と認めることはできなかった。

ビビンバは声を震わせながら言った。

「万太郎は⁉　万太郎を出して！」

「それはできない。いま独房に入って査問会にかけられている」

「やめてっ！　あんな子供に…ひどいじゃない！　それでも私たちの仲間なの!?」
「ビビンバ、よさんか」
スグルはビビンバを抑えた。ビビンバはワッとスグルの胸で泣いた。
代わりにスグルが電話に出た。
「すまないなロビンマスク。ビビンバも不安なんじゃ」
「…そうだろうと思う。心中は察しているつもりだ」
ロビンマスクはため息を殺して言った。
「だがキン肉マン、私だってこの結果を納得しているわけじゃない。何かの間違いだと信じたいんだ」
「わかっておる…お前も辛かろう？　他の若い正義超人たちの手前もあるしな…万太郎を不問にするわけにもゆかんじゃろう。面倒をかけてすまんな」
ロビンマスクがグッと気持ちを堪えるのが伝わった。万太郎が疑われる――スグルが最も辛いはずなのに、いまは仲間の立場も思いやっている。さすがはかつてのリーダーでキン肉星の大王だ。
スグルは落ちついた声で続けた。
「だがロビンマスクよ。たとえどんな疑惑がかけられようと、ワシは万太郎をどこまでも信じ

ておる」

「キン肉マン…」

スグルは多くの助言をすることを避けていた。ロビンマスクからいまのファクトリーの状況を聞いていたからだ。

ファクトリーは正規軍と革命軍に分かれて派閥抗争が行われている。しかしそれは正義超人たちの戦意高揚のあらわれと思い、教官たちは黙認していた。

それにかつて伝説超人にも分裂の危機はあった。思想が分かれてぶつかりあうのは、正義超人たちが実力をつけてきた証拠なのだ。

だが最も潔白に近いはずの、正規軍の大将である万太郎が追い詰められた。これは非常に微妙な問題をはらんでいる。ファクトリーの勢力図に重大な影響が出る。

革命軍の中に悪行超人がいるのか？　それとも正規軍の中に万太郎の地位を狙った者がいて、その本人こそが悪行超人なのか？　ファクトリーは騙されているのか？　そもそもこの事態はすべて、悪行超人が狙っていた事なのか。

不透明なことが多すぎる。いずれにせよ今後の正義超人育成で重大な局面を迎えているのは確かだった。

とにかくいまはファクトリーの混乱を防ぐため、アイアン・スエット反応の無かった万太郎

を処罰するしかない。

スグルはロビンマスクの立場を考えたうえで、言葉を選んだ。

「私はお前たちも信用している。必ず、事態を収拾してくれるとな」

「任せろ。とりあえず検査に使った正義超人たちの汗は大事に保管してある。再検査は申請さえあればいつでも行えるさ」

しかし再検査は革命軍が許さないだろう。正規軍の万太郎だけを特別扱いするわけにはいかない。

ロビンマスクは申し訳なさそうに言った。

「キン肉マン、必ず万太郎は救ってみせる。辛いだろうがもう少しガマンしていてくれ」

「大丈夫じゃよ。ロビンマスク」

スグルは微笑んだ。目尻に柔和だが、意志の強そうな皺が刻まれた。

「万太郎は自力でなんとかする子さ。ワシらの子なんじゃから」

スグルは受話器を持ったまま、片方の手でギュッとビンバの手を握った。

査問会の終わったキン肉マンに与えられた処分は〈一時追放〉だった。

悪行超人の疑惑がある以上、ファクトリーの生徒とみなすことはできなかった。それは査問

委員会としても苦渋の決断だった。
万太郎のロッカーの中身や身の回りのものはすべてまとめられ、万太郎本人に突き返された。生徒証も登録証も没収された。
ひと抱えの荷物だけを渡された万太郎は途方に暮れるしかなかった。
「そんないきなり出てけって言われても…ドコに行けばいいんだよ!?」
万太郎はファクトリーの仲間たちにすがるように訊いて回った。しかし、正規軍の正義超人たちは目を伏せて何も答えなかった。
キッドも、セイウチンもガゼルマンも眉を寄せるだけだった。
「ねぇキッド！　なんとかしてよ！　ボクは悪行超人なんかじゃないよ！」
「…………」
「セイウチン！　ガゼルマン！」
「…………」
キッドたちには、どうすることもできない状態だった。
「どきなキッド」
そこにマグネットンがやって来た。万太郎とのバトルで負ったケガはもう回復していた。革命軍を追放されたが、正規軍入りはしていない。無派閥層にいて訓練を続けている。しかし以

前のように万太郎を敵視することは無くなっていた。しかし今回は——。

マグネットンは忌ま忌ましそうに、万太郎に言った。

「見損なったぜ万太郎。ホネのあるヤツだと思ってたのに…何がキン肉マンの息子だ。悪行超人のくせに俺たちを騙してやがったな」

「な…なに言ってるんだよ！　ボクが悪行超人なワケないだろ!?　いままで一緒に戦ってきて、わかんないの!?」

「うるせえっ。これじゃキン肉マンも正義超人だかどうだかわかったもんじゃねぇな」

すると万太郎の顔にビクッと怒りの表情が浮かんだ。

「…父上をバカにする気か…？」

「なんだヤル気か？　こんな早く悪行超人と戦えるなんて願ったりだぜ！」

「許さないっ!!」

マグネットンの挑発にのった万太郎は、荷物を放り投げて飛び掛かった。

すると見ていた正義超人たちがワッと押しかけた。

「このヤロ——!!」

「ふざけんじゃねぇ〜〜〜〜!!」

「くたばれ——!」

殴る、蹴る、ぶつかる、投げる――ファクトリーの中は大乱闘になった。

その中、スルリと万太郎に近づく影があった。

「…うっぐ…！」

万太郎の首に細い腕がからまり、腕が反対にキメられ、足をねじりあげられた。

変形オクトパス・ホールド――スパイダーだ。

万太郎はワザをかけられながら呟いた。

「す、スパイダー…頼む、ボクの無実を証明して…」

「悪行超人がファクトリーで暴れているとなると…これは殺していい、ということか？」

スパイダーはニヤリと笑い、万太郎の身体をさらにネジ上げげた。万太郎は悲鳴をあげた。

「…ウギャ……!!」

「やめろスパイダー！」

キッドがスパイダーの肩を蹴ってカットに入った。スパイダーはあっさりワザを解き、万太郎を放した。

万太郎が地面にズゥンと倒れると、ファクトリーの中はシーンと静かになった。

キッドが万太郎を見下ろしている。万太郎が足を掴もうとした。

「…き、キッド…なんとかしてよ…」

キッドはクルッと背中を向け、冷たく言った。
「…出てけ」
「え？」
「いますぐファクトリーから出てくんだ、万太郎」
「…そんな…」
万太郎は愕然となった。最後まで味方してくれると思っていた親友が自分を見捨てた。
「……わかったよ」
万太郎は観念したように静かに立ち上がり、自分の荷物を拾い集めた。
そして荷物を抱え、寂しそうに言った。
「…友だちだと思ってたのに…。ボクを信用してくれないんだね」
キッドは答えない。背中を向けたままだ。
万太郎は言い捨てるように呟いた。
「いっそお前なんか仲間じゃない、って言ってくれよ」
キッドの背中はそれでも何も言わなかった。
「バカヤロ〜〜〜〜〜！」
そう叫ぶと、万太郎は荷物を抱えてファクトリーから出ていった。

背中を向けたままのキッドにセイウチンが近寄った。
「キッドさん…いいんですか？」
「…………」
「キッドさん…？」
キッドの目には悔し涙がいっぱいに溜まっていた。
万太郎を信じてやりたい、助けてやりたいのはもちろんだが、クロの検査結果が出た以上味方することはできない。
それは正規軍の結束に悪影響が及ぶからだ。幸い、正規軍は革命軍のようにスパイダーという一枚岩の集まりではない。キッドが新しいリーダーとなって統率しなくてはならない。でなければ革命軍が危険な考えのまま、ファクトリーを制圧してしまう。
キッドは涙を呑み込み、正義超人たちにふり返って大声で言った。
「万太郎はいなくなった！　今日から俺が正規軍のリーダーになる！　みんな力を合わせて、ファクトリーの修行に励もう！」
すると正規軍の正義超人たちから歓声が沸き上がった。
その様子を、スパイダー始め革命軍の正義超人たちが不気味に見つめていた。
キッドはその場を去る時、スパイダーの側を通った。

「…スパイダー、これで勝ったと思うなよ」
スパイダーはわずかに、ニヤリと笑った。
「万太郎を見捨てるとはな。やはりお前はキレる…絶対に革命軍に入れてみせよう」
キッドはスパイダーのすぐ側まで顔を近づけて低く言った。
「…アイツは絶対帰ってくる。そういう男だ。万太郎を見くびるな」
キッドはトレーニングに戻って行った。
そして万太郎の出ていったファクトリー正門は固く閉じられた。

追い出された万太郎はファクトリーのすぐ近くの岩場に野宿生活を強いられることになった。
「ひどいよなぁ…いきなり出てけって言われても行くとこなんてないよ～」
レッスル星からキン肉星への送迎機は定期便で、決まった日程でしか出航していない。もし送迎機があってもロクに金も持たされないままファクトリーを追放された万太郎は乗ることができない。
仕方なく、ファクトリーから盗んできたベッドのシーツやタオルなどでテントを作った。木

ぎれと小石でカマドを作り、これも食堂から盗んできたガスコンロを置いた。急いで追い出された割にはちゃっかりしていた。

「ガゼルマンのヤツ、困ってるかな～。…ふん、もうどうでもいいや」

万太郎はガゼルマンの大事にしていたドロップ缶を持ち出していた。

そして食事がわりに舐めてみた。

「…うっ、マズッ！　なんだこれ、プロテインドロップ？　こっちはアミノ酸ドロップにカロチンドロップ…あいつこんなモノ食べて鍛えてたのか～。やっぱりAクラスの生徒はお菓子も違うモンだな～」

万太郎は次にフロシキからセイウチンの部屋から持ってきたマンガと、キッドの部屋から持ち出した手帳を出した。

「キッドからは勝手に手帳をもらってきちゃったけど…。何だろこれ？」

その手帳にはビッシリと女の子の名前と電話番号が書かれていた。

「わっわ！　居酒屋のレイコちゃんやボーリング場のクミちゃん、喫茶店のチーコちゃんまで！　あいつこんなにナンパに成功しまくってたのか～、ボクにちょっとぐらい紹介してくれたっていいのに――――！」

万太郎はバンバンと地面を叩いて悔しがった。

「…でも、スゴいお宝手帳だけどお金もケータイも無いから電話できないんだよなぁ」

そうボヤいて万太郎はまたフロシキからお菓子や果物、カップカルビ丼にエッチ本など続々と取り出した。過保護で育った万太郎にスグルは食べ物や娯楽グッズをどっさり送っていたのだ。

「ま、ほとぼりが冷めたら何もなかったように帰ればいいや」

そう呟いて、万太郎はセンベイをパリパリかじりながらエッチ本を広げた。

ファクトリーを追放された万太郎だが、生来の性格からかかなり呑気に構えていた。

万太郎がいなくなってからファクトリー内の勢力抗争に大きな変化があった。

まずニューリーダー、キッドが率いる正規軍だが属する正義超人の数が減少していた。革命軍の巧みな勧誘とスパイダーのカリスマ性に惹かれて、鞍替えする正義超人が何人も出た。

一方「正義超人が最強である証明をするため地球へ行く」という、明確で正義超人たちのプライドをくすぐる目的を掲げる革命軍は発言権を強めていた。いまではスパイダーは教官たちに口を出せるポジションにまで成長していた。

しかし、最も大きな変化は無派閥層の増加だ。

いまファクトリーには200名弱の正義超人が残っている。そのうち50人が正規軍で、革命

軍も同じ50人である。つまり残りの100人ほどは、どちらの味方につくか考えあぐねているのだ。

正規軍のシンボルだった万太郎には、言葉にしがたい魅力があった。いつか何か、必ずやってくれるという期待。その未知数なパワーで正規軍が束ねられていたのは確かであった。その万太郎がいなくなり熱血型のキッドがリーダーになったことで、正規軍は性格の明るいマイペースタイプの正義超人たちから受け入れられなくなっていた。

革命軍の方は一枚看板のスパイダーを筆頭に、ゴージャスマンやジャイロなど実力者が勢ぞろいしたスター軍団だが、発言の右傾化や仲間への冷淡さで情の厚い正義超人、主に二世超人たちから毛嫌いされていた。

二大勢力から、様子窺いの無派閥層を加えた三大勢力へ。

ファクトリーの勢力構図はまさに混沌の様相を呈していた。

万太郎が追放されてから一週間が過ぎた頃。

スパイダーとキッドは再び二人きりで会談していた。

正規軍と革命軍の2トップの話の場はスパイダーが提案した。

場所は第5会議室。無派閥層の正義超人たちが多く住む寮のすぐ側にあり、縄張りとしては正規軍と革命軍の中間の位置にある。

中立のポジションで交渉をする——それはスパイダーの譲歩だった。

キッドとスパイダーは向かい合わせに座った。ほかには誰もいない。

まず話を切り出したのはスパイダーだった。

「キッド。そろそろいがみ合うのはやめにしないか」

キッドはドカッと足をテーブルに上げた。

「お前らしくねえな。どこまでもウチとやり合うつもりじゃないのか？」

スパイダーは何か企んでいる——キッドは緊張を隠すためにわざと横柄な態度にでた。

スパイダーはキッドの心中を知ってか知らずか、あくまで慇懃に言った。

「そっちは大将の万太郎がいなくなった。正規軍として軍団を形成する意味はなくなっているだろう」

「バカ言え。軍団だとかなんだとか、こっちにゃあんまり関係ねえんだよ。そもそも軍団なんてくだらねぇ集まりを始めたのはそっちが先だろう」

スパイダーは組んでいた腕をといて話しはじめた。

「…なあキッド、揚げ足とりはやめよう。単刀直入に言うが、私はお前を高く評価している。

正義超人の中でもズバ抜けた実力者だ。どうしても、お前の力が欲しい」
「…………」
「私と組め。そして正規軍、革命軍が連合となり地球に乗り込むのだ」
「そんな大勢で行くなんて、ロビンマスク先生たちが許さねぇだろ」
「私は今後、教官たちの説得の根回しに走る。お前には連合軍の指揮を執らせたい」
キッドは何も答えない。スパイダーは続けた。
「よく考えろ。いまお前たちがしなくてはならないことは何だ？　追い出した万太郎への詫び？　違うだろう、立派な正義超人となって地球へ戦いに行くことだ。いつまでも、こんな小さな場所で友情ゴッコをしている場合ではないはずだ。…キッド、私と共に戦うのだ。大いなる敵どもと」
キッドはクスッと笑った。
スパイダーはそれが「受け入れ」だと思った。
しかし、キッドの次の言葉は違っていた。
「…てめえは何でも上からモノを言う野郎だな。俺の大嫌いなタイプだ」
キッドは足を下ろして、スパイダーの顔を見て言った。
「正直に言えよ。スパイダー、焦ってんだろ？」

スパイダーの細い眉がわずかに動いた。

いまファクトリーの中では勢力争いのほかに、新たな争議が沸き起こっていた。

本当に万太郎は悪行超人だったのか？　どう考えてもあのバカでマヌケで根性無しで、自分より仲間のことをいつも考えていた少年が…信じられない。

これは何かの陰謀ではないか？　もしそうなら首謀者は誰だ？　正義超人たちの間に疑惑の渦が広がっていた。

キッドがスパイダーに言った。

「万太郎がいなくなって一番得したのは誰か。まあ単純に考えりゃそいつが犯人だわな」

キッドはスパイダーを挑発するように、チョンと指さした。

「それを疑わないほど、みんなバカじゃないぜ」

「…………」

「万太郎がいなくなったら、どいつもこいつも革命軍になだれこむと思ってたんだろ。考えが甘かったな」

スパイダーはあくまで表情を変えない。

そして冷たい声のまま訊いた。

「私が万太郎を追い出した首謀者で…悪行超人だと言うのか？」

「そうは言ってねえよ。ただ万太郎が悪行超人だとは誰も思ってねえってコトさ。そっちの軍団にもそう思ってるヤツはいるんじゃねえか？」

キッドは身を乗り出して挑発するように続けた。

「どこかの陰謀のヌシさんも、万太郎の人気を見くびって手を早めすぎたよな」

スパイダーは目を細めた。冷たい表情にわずかだが、動揺が見えた。

キッドはスパイダーにキッパリと言った。

「まずはっきり答えてやろう。俺はてめえらと手を組むつもりは無い。これからも、絶対にだ。試合の終わった直後の仲間を、恥さらしたってだけで殺そうとした野郎と組もうなんて思わない」

スパイダーは黙って聞いている。キッドが続ける。

「俺だけじゃない、正規軍はみんな万太郎の無実を信じてる。近く、査問会にアイアン・スエットの再検査を申請するつもりだ。その検査には俺たちも立ち会わせてもらう」

「…一度行われた検査を違う形で再度行うには、ファクトリー内の正義超人全員の総意が無いと無理だ」

「知ってるさ。もう正規軍と無派閥の正義超人たちは同意してる。後はてめえら革命軍だ」

キッドのスパイダーとの会談の目的は、スパイダーたち革命軍の再検査の同意をひきずりだ

すことだった。

しかしそれは万太郎を引き戻す可能性がある。

スパイダーには不利になるはず。それを承知でキッドは駆け引きに来たのだ。

「そっちに断る理由は無いはずだぜ。それとももう一回、悪行超人を捜し出すのに不都合でもあるのか？」

長い沈黙が訪れた。

スパイダーは動かない。キッドは聞かれない大きさでゴクリと緊張の唾を飲んだ。

そして、スパイダーが沈黙を破った。

「…いいだろう、私も同意しよう。しかし条件がある」

「何だ」

「私とリングで戦え。お前が勝てれば、万太郎を加えてアイアン・スエットの再検査の申請を認めよう。正義超人らしく決め事はリングの上で決めようじゃないか」

キッドは正直、スパイダーとの勝負には不利を感じていた。

あの糸攻撃を封じる術はない――キッドが答えに一瞬迷っていると、スパイダーがキッドの口調を真似て言った。

「断る理由はないはずだが？」

そして、不気味にニヤリと笑った。口の端から巨大な牙がヌラリと見えた。
キッドは立ち上がって答えた。
「…自分で言ったことだ。お互い後悔ナシで戦おうぜ」
ふたりは握手をしなかった。

ファクトリーのすぐ近く。
岩場でテント暮らしの万太郎を訪れる者がいた。
セイウチンだ。
「万太郎さん、起きてますか?」
セイウチンは万太郎がファクトリーを追放されてからも、定期的に様子を見にファクトリーを抜け出していたのだ。
セイウチンがテントの入り口を叩くと、中からニュッと万太郎が顔を出した。
「セイウチン、待ってたよ～っ。さ、入って入って」
「はい。…わっ、クサッ!」
テントの中はゴミ溜めだった。万太郎はもともと身の回りのことは家来がすべてやってくれ

ていた坊ちゃんだ。ファクトリーの規律が無ければ自分から掃除片付けをすることはない。
そのうえセイウチンが差し入れてきた食べ物やお菓子を食べ散らかし、10代の少年特有の脂っぽい匂いもあいまって、テントの中は異様な空気に満たされていた。
それに万太郎はファクトリーを追い出されてから一度も風呂に入っていないのだ。野性児のセイウチンでも鼻をつまみたくなるクサさだった。
セイウチンは大きな身体を曲げるようにしてテントの中に入った。
「身体を洗ってないんですか？　万太郎さん」
「だってお湯を沸かすの面倒くさいじゃん」
「そりゃそうですけど〜、洗濯ぐらいはしましょうよ」
セイウチンはシミだらけの万太郎のパンツを見てそう言った。
「そんなのいいから。ねね、今日は何を持って来てくれたの？」
「今日はですね、食べ物とかマンガとかじゃないんです」
「な——んだ」
そう言うと万太郎はゴロリと横になってお尻をポリポリと掻いた。
「じゃあ何しに来たワケ？」
「報告があるんです。…明日、キッドさんとスパイダーが戦います」

万太郎がわずかに身を起こした。
「…なんであのふたりが対戦するの？　また公開スパーリングなの」
「いいえ。万太郎さんの無実を晴らすためです。キッドさんは革命軍からアイアン・スエットの再検査容認の同意を得ようと、スパイダーさんに対戦を申し込んだんです」
「バッファローマン先生やロビンマスク先生たちは何も言わなかったの」
「先生たちは生徒が公式な場で戦い合うことについては何も言いませんよ。それもトレーニングの一環ですからね。それにあのオニ教官たちも、きっと万太郎さんの無実を信じてますから」
「…………」
「キッドさんだって命がけであのスパイダーと戦うんです。それもみんな、万太郎さんに戻ってきてほしいからなんですよ」
万太郎は何も言えなかった。キッドたちの自分への思いがヒシと伝わる。
しかし、一時的だとはいえキッドが自分を見捨てたことを忘れていなかった。それは意地となって万太郎の心に凝り固まっていた。
「ふ、ふんっ。キッドが誰と戦おうなんて知らないね。あんな奴はもう仲間じゃないよ」
「万太郎さぁん、そんなコドモみたいな言い方…」

「だってアッチもそう思ってるんだろ？」
そう言って万太郎はセイウチンに背中を向けた。
セイウチンはため息ついて言った。
「万太郎さん…キッドさんがどんな思いしてるか、わかってあげてください」
実は万太郎にはキッドの本当の気持ちが痛いほどわかっている。ただひねくれ者の性分が正反対の態度をとらせるだけである。
それに、万太郎がスパイダーとの対戦に何か感じることがあったとしても、何もできる立場にはない。万太郎は言い捨てた。
「用はそれだけ？　なら帰っていいよ、キッドにせいぜい頑張れって言っといて」
「いえ。今日はもうひとつ目的があるんです」
「？」
するといきなり、セイウチンがブチューと万太郎の頬にチューをしてきた。
「おっ、おわ〜〜〜〜〜〜！　なんだっいきなり!?　気持ち悪いっやめろセイウチン!!」
万太郎はセイウチンに押し倒された。
セイウチンの巨体の下でジタバタするが、セイウチンは万太郎の肩をしっかり抱いて離れない。目を閉じて頬をチューチュー吸っている。

「おっ、オエ～～～～～～～！　やめんかボクにはそんな趣味は無いっ!!」
「…やっぱり…」
いきなりセイウチンが万太郎から離れた。そしてペッペッと唾を吐いた。
万太郎は頬をゴシゴシと吹きながら言った。
「おっ、おいこら！　そっちが勝手にチューしといてペッペッはないだろ！」
「…万太郎さんの汗、すごい鉄の味です」
「へ？」
「万太郎さんがアイアン・スエットじゃないなんて大ウソですよ。ものすごい鉄分いっぱいです。ワシよりも…たぶん、どの正義超人よりも」
万太郎はキョトンとしている。セイウチンは話を続けた。
「検査結果は最初からおかしいと思ってたんです。万太郎さんは普通じゃないアイアン・スエットの持ち主だって、ワシは信じてましたから」
「なんで？」
「マグネットンとの試合、覚えてますか」
「ああ。最後はマグネットンの自滅だったな。あいつ自身の磁力パワーのせいで、身体が鉄のリングに吸い付けられてマンタローストレッチの弓なりが強くなった」

「違いますよ。ハタから見てて気づきました。あれはマグネットンが万太郎さんの身体に吸いよせられてたんです」

「ボクの身体に？」

「そうです。普通の正義超人をはるかにしのぐ、多量の鉄分を多く含む万太郎さんのアイアン・スエットにね。試合で汗びっしょりの万太郎さんの身体は、まるで鉄分の固まりだったんですよ」

万太郎はそう言われてもピンとこない。自分の汗のことなんてわからないのだ。

万太郎は別の質問をした。

「じゃあなぜ…検査の時のボクの汗はアイアン・スエットじゃなかったんだ？」

するとセイウチンは、ポケットからビニールに入った紙片を取り出した。

「これ、検査の時に出た万太郎さんの汗を含ませてます。正規軍の正義超人たちと協力して、検査の終わった汗の保管庫に忍び込んだんです。苦労しましたよ」

「…それで？」

「ちょっとだけ、舐めてみました」

万太郎は次の言葉を待った。

セイウチンは低く言った。

「別人です。これは万太郎さんの汗ではありません」
「…そっ、そんな！」
「間違いありません、それどころか鉄の味は一切しなかった。これこそ悪行超人のものだったんです。…舐めちゃったから気持ち悪くて一時間ぐらい吐き気が止まんなかったですよ」
「じゃあ、僕のコップと悪行超人のコップが入れ換えられてたってことか!?　いったい、いつの間に…」
「たぶん検査中のわずかなスキにすり替えたんです」
万太郎を陥れたのはファクトリーが追っていた悪行超人本人だった。
ということは、いまもファクトリーの中で悪行超人がほくそ笑んでいる。
万太郎はフツフツと怒りを感じた。
「よくもボクを…いったい、どいつに化けてるんだ！」
「もうわかってます」
万太郎はセイウチンを見た。セイウチンは表情を険しくさせて言った。
「僕が舐めたその汗…濃いタンパクの味がしました」
タンパク？
「子供のころ、イタズラで舐めてみたことがあります。クモの巣と同じ味でした」

クモの巣？

いまファクトリーの中で、クモの巣を吐き出す超人はひとりだけ——。

「す…スパイダ——!?」

万太郎の驚いた声に、セイウチンはゆっくり大きくうなずいた。

万太郎は立ち上がった。

「そんな…アイツが…。じゃあ、キッドが危ない!!」

スクッと立った万太郎に、セイウチンは嬉しそうに言った。

「万太郎さん、戻って来てくれますか？」

「うっ…」

しかし、万太郎はシリごみした。

スパイダーとの実力は天地ほど差がある。ましてあの冷酷な表情を前にすると、万太郎はクモの巣にかかったエサの気分になった。

キッドを助けたいのはやまやまなのだが…。

「あ、いや…ガゼルマンとかいるから大丈夫じゃないか？」

セイウチンはガクッとなって万太郎に言った。

「ちょっと！　そんな呑気なこと言ってる場合じゃないでしょう！」

「ぼ、ボクちょっと朝からお腹痛いから…」
そう言って万太郎は頭から寝袋に入ってしまった。
セイウチンは寝袋をバンバン叩いた。
「万太郎さ〰〰〰ん！　仮病なんか使わないで戻って来てよ――――！」
それでも万太郎のタヌキ寝入りは頑固だった。

次の日。キッドはスパイダーの餌食になった。

第5章

必殺技、炸裂！



ファクトリー敷地内には特設リングが作られていた。
最も高度で厳しいスパーリングが行われる特別製のリング——その名も〝ポスト・ヘル〟である。
まず30平方メートルの広さの敷地の上空10メートルほどの位置に、鉄骨で組まれた通常の四角形のリングが設置してある。
これだけでも変則的なリングだがポスト・ヘルの最も特異なのはリングの外にある。
敷地には太さも長さも違う鉄製の柱が不規則に、また無数に埋められているのだ。
リングの外に逃げれば、ムササビのように柱＝ポストを渡り飛び、空中ワザを中心とした自由な場外乱闘が可能だ。
しかしリング下の敷地には鋭く尖った鉄剣がビッシリと隙間無く並べられている。
まるで地獄に落ちてくるエサを待っている餓鬼のように——。それは多くの正義超人の血を吸ってきた文字通り地獄のリングだった。
いま、そのポスト・ヘルで試合が行われている。
アイアン・スエット再検査の申請をかけて、正規軍のキッドと革命軍のスパイダーの両軍大将の直接対決だった。
勝負にはファクトリーの教官も立ち会っている。ファクトリーの勢力図を決める大事な決戦

だ。放任しておくことはできなかった。
またコロッセウム形式の観客席には、正規軍、革命軍、無派閥層の正義超人たちが結果を見届けるべく固唾を飲んで試合を見守っていた。
キッド対スパイダー。
公正で、小細工のない、正々堂々とした実力正義超人同士のバトルのはずだった。
しかし——。
「ぎゃあああああああ〜〜〜!!」
キッドの絶叫がリング中央から響いた。
セコンドのガゼルマンが地上からキッドを呼んだ。
「き…キッド——!」
キッドはスパイダーに完全に捕まっていた。
試合の最初はキッドが押していた。スピニング・トゥ・ホールドにバックブリーカーにフェイスロック…地味だが確実な、そしてテキサスブロンコにふさわしい熱いファイトでスパイダーを追い詰めた。
流れが変わったのはキッド流三角窒息締めがキマッた時だ。
スパイダーの肩にキッドが乗って、左腕を上げて固め頸動脈を右足のふくら脛で絞める。キ

ッドの必殺技のひとつだ。成績上位の正義超人でもこのワザをはずせる者はいなかった。
誰もがキッドの早い勝利を確信した。
だが——スパイダーは苦悶の表情を浮かべるでもなくニヤリと笑った。
「なかなか巧い試合運びだな、キッド…。だが甘い」
「なにっ？」
「相手の特性を知らぬ正義超人は必ず負ける」
すると、スパイダーの身体がブニュブニュと揺れた。
ヌッ。ヌルッ。ヌポッ——。
スパイダーの脇腹から、剛毛に覆われた節足が粘液とともにヌラヌラと伸びてきた。
昆虫の脚だ。
「なっ、な……!?」
脚は全部で6本。すべての先端に不気味な鋭い爪が伸びている。
スパイダーは両腕を含めて8本手となった。
「そろそろ私のスタイルで試合させてもらおう」
スパイダーは自分の首と腕をホールドしているキッドの腕と足を、脚を使ってボキリと折りながら引き剝がした。

「ぐっ、ああああああ〰〰〰!!」

そして8本の腕を駆使してスルスルとキッドの身体をまるめこんだ。

8本の腕は複雑に連動しあい、キッドの肩、首、背筋、股関節、腰、足腱のすべてを同時にキメた。キッドの身体はゴムマリのように変形させられた。

ボキッ、ゴキッ、ゴキゴキッ。

キッドの身体の骨が折れてゆく。キッドはいままで想像もしなかった関節技の威力に悲鳴をあげた。完全に全身をロックされてのたうつこともできなかった。

ガゼルマンはロビンマスクに訴えた。

「あの脚ワザは反則では!?　スパイダーはいままで脚の存在を隠していたんですよ！」

「反則ではない。スパイダーの特性を見抜けなかったキッドのミスだ」

「そんなっ！」

ロビンマスクはスパイダーに味方したのではなかった。

〝正義超人たるもの自らの肉体から繰り出す技、及び自らの肉体に内蔵される兵器以外を使った攻撃を慎むこと〟これはバトルにおける絶対の法律、正義超人原則の13条第2項である。つまり、肉体の一部を使った攻撃であれば何でも許されるのだ。

スパイダーは確かに脚の存在を隠していた、しかしそれは正義超人原則に触れていない。

「くそっ…！」
何もできないセコンドのガゼルマンは拳を握るしかなかった。
一方、革命軍側の正義超人たちからはスパイダーコールが起きていた。
「ス～パイダ――！　ス～パイダ――！」
そんな中、バッファローマンは試合を見ながら呟いた。
「あのワザはアシュラマンに似ている…」
スパイダーの知的で冷血な戦いぶりに、かつての仲間で悪魔騎士最強だった魔界のプリンス・アシュラマンの面影を見た。
キッドの顔から次第に血の気が失せはじめた。

その頃。
セイウチンはファクトリーの裏口に張っていた。祈るように呟いている。
「万太郎さん…お願い、戻って来て…！」
裏口の門は内側しか開かない。セイウチンは昨晩、タヌキ寝入りする万太郎に言っていた。
キッドの試合直前に裏口にいて、万太郎からのノックを合図に閂を開けると。
しかしタヌキ寝入りしていた万太郎がちゃんと聞いていたかはわからない。

それでもセイウチンは万太郎を信じていた。必ず、キッドを助けに戻って来る——。
だがキッドの試合が始まってしばらく経つのに、ノックの音は聞こえない。
(万太郎さんのバカ…！　本当に負け犬になっちゃったの…!?)
セイウチンは扉を悔しそうに叩いた。
そしてたまらず勝手に閂を抜き、扉をバンッと開いた。
「万太郎のバカヤロ————！」
「ギャッ…！」
ちょうどタイミングよく、扉の向こうにいた少年の顔面に扉がバカンとぶつかった。
情けない体勢でぶっ飛び、タラコ唇がジンジンと真っ赤に腫れ上がる。
それは万太郎だった。
「まっ、万太郎さーん！」
「…いたた、ノックの合図で開けるんじゃなかったの〜？」
セイウチンは目に涙をいっぱいに溜めて言った。
「やっぱり来てくれたんだ！　…もう来ないかと思った…」
万太郎は立ち上がって、お尻をパンパンとはらった。
グレーのリングブーツに手袋、イエローのストライプが走るブルーの半袖全身タイツ。

キン肉星の王子である証、胸の〝KN〟のロゴ。
リングに向かいでたちだ。万太郎は戦う意思満々で現れたのだ。
万太郎はグッと胸をはって言った。
「ふん。ヒーローはちょっとぐらい遅刻した方がカッコいいんだよ」
本当は緊張のあまりゲリでトイレに長く座ってたことが原因なのだが、この際はどうでもよかった。
セイウチンは万太郎の腕を引いた。
「早く来て！　試合はもう始まってるんですよっ」
するとそこに声をかける者がいた。
「コラー！　そこで何をやってるんだ!?」
見回り当番だった革命軍のアポロンマンだ。アポロンマンは万太郎を見つけて目をむいた。
「まっ、万太郎…!?　まだ追放は解けていないはずだ！　なぜここに!?」
「…やべっ」
「た―――――っ！」
いきなりセイウチンはアポロンマンにタックルした。
「うぐあっ！」

さすがのアポロンマンもセイウチンの巨体は受けきれなかった。
「セイウチン、きさま…どういうつもりだ!?」
セイウチンはアポロンマンを押さえながら万太郎に言った。
「万太郎さん！　ここはワシに任せて、早くキッドさんのところへ！」
「…よしっ、頼んだぞセイウチン！」
揉み合いになったセイウチンとアポロンマンに背を向けて、万太郎は試合会場に向かって走り去った。

ポスト・ヘルの下には正規軍の正義超人たちが集まっていた。
ガゼルマンが叫ぶ。
「キッド…しっかりしろキッド――――！」
ガゼルマンの腕の中にいるキッドは答えない。完全に意識を失っていた。
全身の骨をメチャメチャに折られ、あげく地面の鉄剣の絨毯にたたき落とされた。
出血が止まらない。足も腕もあらぬ方向に曲がったまま。明らかに重体だった。
ジ・アダムスが狼狽した声で言う。
「マズい、早く医務室に運ばないと命にかかわる…！」

キッド対スパイダーの勝負はスパイダーの圧勝だった。
革命軍の歓声の中、スパイダーはキッドの身を案ずるでもなくリングの上でガゼルマンたちを見下ろしていた。
「…勝負にならんかったな」
ガゼルマンは悔しそうにスパイダーをギリッと見上げた。
「この野郎、次は俺が相手だ！」
ガゼルマンが立ち向かおうとしたその時——。
「キッド————ッ！」
コロッセウムに少年の甲高い声が轟いた。
万太郎だ。
コロッセウムが一瞬、静まり返った。
「なにっ…！」
「ま、万太郎だ！」
「万太郎が帰ってきた…！」
正義超人たちの呟きはやがてどよめきに変わった。
「どいてくれ——！」

　万太郎はまっすぐキッドの側に走って来た。ガゼルマンとともにキッドを抱き起こしながら言った。
「キッド！　しっかりしろキッド！」
「…ま、ん、タロー…？」
　意識を失っていたキッドが、わずかに目を覚ました。
　そして嬉しそうに呟いた。
「…やっと帰ってきやがったな…遅いぜ…」
「キッド、こんなにケガして…ムチャな奴だよ！」
　キッドはフッと微笑んで言った。
「…お前を見捨てたこと…悪かったな…これでも気にしてたんだぜ…」
「もういい！　わかってる！　だから…」
　キッドは、残りの力を振り絞って、弱々しく万太郎の肩を握った。
「…スパイダーがお前をハメた…間違いない…。あんなクソッタレのクモ野郎に正義超人ヅラされるなんてガマンできねえ」
「キッド…」
「見せてくれよ。本当の正義超人魂ってヤツを」

そう言ってキッドはニコリと笑った。
そしてブゥッと大量の血を吐いた。
万太郎の顔と胸に、赤い斑点が付いた。
「キッド——————！」
救護チームが万太郎とキッドの間に割って入った。
「どくんだ！　急いで手術する！」
キッドは呼吸器をつけられて救護室へ運ばれて行った。
キッドほど鍛えられた正義超人が、あんな無残な大ケガを負うとは——正規軍の誰もがスパイダーの実力をあらためて思い知らされていた。
しかし。たったひとりだけが、立ち向かう勇気に震えていた。
万太郎は胸に付いたキッドの血をそっとぬぐった。
その背中がブルブルと震える。
「ま、万太郎…！」
ガゼルマンが万太郎の震える背中から立ちのぼる熱気を感じて、嬉しそうに呟いた。
「…この気…これだよ、コレが俺たちを引きつけたんだ…！」
万太郎の額に、クワッと文字が浮きでた。

〃肉〃のマークだ。
友情と正義に突き動かされた時にキン肉一族だけが発揮する〃火事場のクソ力〃の証。
いま万太郎の怒りはすべてスパイダーに向けられていた。
万太郎はビッとスパイダーを指さして叫んだ。
「スパイダー――！　ボクと勝負しろっ！」

スパイダーとの対戦に問題は無かった。
万太郎は一時追放の身分だが、ファクトリーから登録抹消されてはいない。試合参加正義超人の条件は満たしている。
そして何より、相手であるスパイダーが対戦相手として認めたのだ。
「願ったり叶ったりだ…貴様をリングで殺してやろう！」
バッファローマンやロビンマスクら教官たちも反対しなかった。万太郎に自分の手で潔白を証明してほしかった。
それはキン肉マンの意思でもあった。
第2試合、万太郎対スパイダー――真の正規軍VS革命軍の頂上対決が再びポスト・ヘルで始

まった。

「レディ、ゴ――――!!」

ロビンマスクの合図とともにゴングが鳴らされた。

「万太郎――――！　万太郎～～～～！」

「スパイダ～～～～！　スパイダ――――！」

ファクトリーは正規軍と革命軍、また無派閥層の正義超人たちの歓声に包まれた。

リングの上では万太郎とスパイダーが探り合いをするようにフットワークで、見合ったままリングをグルグルと回っていた。

スパイダーが長い髪を揺らしながら言った。

「…この時を待っていたぞ万太郎。私の標的は最初から貴様だった。正義超人どもの中心であり、キン肉マンの息子であるお前がな」

万太郎は逆にスパイダーに訊いた。

「最初からキッドをあんな目にあわせるつもりだったのか？」

スパイダーは不敵に答えた。

「お前をリングにおびき出すために存分に使わせてもらったぞ。なかなかよく動いてくれたものさ」

万太郎はギリッと歯ぎしりした。
「…許せないっ！　絶対に倒す！」
そう言うと万太郎は足払い水平蹴りを見舞った。
素早い蹴りにスパイダーの長身がフワッと崩れた。リングに倒れたスパイダーめがけて、万太郎はコーナーポストに駆け上がり宙を飛んだ。
「そりゃ――――！」
バク宙のまま身体をきりもみし、スパイダーに高角度からのエルボードロップを見舞った。サマーソルト・エルボーだ。スパイダーの喉にズンッと万太郎の肘がめり込む。
「ぐぅはっ…！」
スパイダーの顔にわずかだが苦悶の表情が浮かぶ。
万太郎は続けてスパイダーの頭を引きずり上げ、首をホールドし、腰をはねあげてブレーンバスターを放った。スパイダーの身体は弧を描き背中からリングに叩きつけられた。
「まだまだくらえ〰〰〰！」
投げっぱなしのタイガー・スープレックス。
ロープに投げてからのフェイス・クラッシャーとケンカキック。
デンジャラス・バックドロップにフランケン・シュタイナー、裏投げの連投――。万太郎は

ありったけの投げ技と打撃ワザをスパイダーに繰り出した。

明らかにスパイダーは押されていた。

激しい攻撃に受け身に徹しているように見えた。

「いける、いけるぞ——！」

ジ・アダムスが歓喜の声をあげた。しかしガゼルマンが言った。

「…いや、キッドの時も最初は押してたんだ。油断するんじゃないぞ万太郎！　スパイダーには…」

「大丈夫さガゼルマン！　このまま一気にキメる！」

万太郎はスパイダーにパワーラリアットを放ち、リングにうつぶせに寝かせた。

そして腕をスパイダーの首にからめ、両足を身体がＳ字に曲がるように膝でロックした。そのまま頭をホールドしてギリギリと絞める。首と腰とモモの腱を同時にキメる全身関節技、ＳＴＦ＝ステップオーバー・トーホールド・ウィズ・フェイスロックだ。

ワザは完全にキマッていた。

万太郎は容赦なくスパイダーの身体をねじりあげた。

「どうだスパイダー！　ギブアップしろー！」

だがスパイダーは表情をまったく変えていなかった。

それどころか平気な声で呟くように言った。
「…こんなものか…？」
「なにっ？」
「ではそろそろ私のワザも受けてもらおうかな」
すると、スパイダーの身体がブニュブニュッとうねった。
ヌルッ、ヌポッ、ヌッ——。
身体の中に隠していた6本の脚を出した。
「わっ…！　なんだこれ!?」
万太郎が驚くヒマもなく、脚で万太郎の足と腕のロックをあっさり外した。
そして6本の脚を使って万太郎の身体を放り投げた。
「うわ〰〰っ！」
宙に飛んだ万太郎はズゥンとリングに叩きつけられる。
万太郎が立ち上がると、スパイダーは8本手を使ってリングに這って立っていた。
脚にビッシリ生えている剛毛。爪がリングをガリガリとひっかいている。
スパイダーの端正な顔の下半分がバックリ割れた。
口の部分から巨大なアゴと牙がヌラリと姿を見せた。

その姿はまさしく、巨大な肉食のクモである。
アゴをカシャンカシャンと開閉させながら、スパイダーは万太郎に言った。
「これが私の本当の姿だ。美しいだろう?」
「ひっ…ひええ〜、気色悪い〜!」
虫が大嫌いな万太郎だ。さっきまでの意気はあっと言う間に消え失せた。
「万太郎、楽には死ねないと思え」
スパイダーはリングをカサカサカサッと這い走った。
万太郎は全力で逃げ回った。
「ぎゃあああ〜! 怖い〜!」
するとスパイダーはブッと糸を吐き出した。
万太郎の足にからまり、リングの上で顔面からズッコケた。するとスパイダーが脚で万太郎を持ち上げ、リングの外に投げた。
「お、おわ〜〜〜〜〜!」
「万太郎っ…!」
そのまま落下すれば、鉄剣の絨毯が待っていた。セコンドのガゼルマンたち正規軍は思わず目をそむけた。

しかし、万太郎は空中で止まった。
「うわっ!?　なんだっ!」
足首に糸が絡まっている。スパイダーの糸が万太郎を落下させなかったのだ。
万太郎はバンジージャンプの途中のようにブラブラとぶら下がったままになった。
スパイダーは糸をくわえた体勢でリングの外の柱に飛び移った。
「私の本当の恐ろしさを見せてやろう」
そう言ってスパイダーは万太郎を逆さまのまま柱にくくりつけた。
そして腰の尾てい骨の付け根部分からも糸を吐き出した。別の柱に飛び移り、また糸を吐く。その繰り返しでまず太い足場糸を放射状に張ってゆく。
足場糸を張り終えると、糸間をつなぐようにらせん状の円網を張ってゆく。
その完成を見て——見ていた正義超人たちは愕然となって叫んだ。
「なっ…なんだアレは!?」
あっと言う間に柱を使った、見事なクモの巣のリングが出来上がったのだ。
スパイダーは不敵に言った。
「これが私の本来の戦い方だ。いまだかつてこのリングを使って私は敗れたことがない」
もがきながら、なんとか万太郎は糸からズルッと脱出した。そして柱にしがみついて言っ

た。
「くそっ…気持ち悪いことしやがって、こんなので負けるか〜！」
万太郎は網の中心に陣取っているスパイダーに、網糸を伝って飛び掛かろうとした。
すると足場糸に張られた横糸の粘りで足がくっついてしまった。
「あっ、あれっ!?」
「バカめ！」
反対にシャッとスパイダーが飛び掛かった。
万太郎は体当たりをまともに受ける。
「うわっ…！」
また落下しそうになる。するとスパイダーが糸を吐き、万太郎を捕まえる。
そのままヨーヨーのように振り回し、鉄の柱に万太郎の身体をしたたかに打ちつけた。
「ぐあっ…！」
万太郎がブァッと血を吐いた。
「どうした万太郎、さっきまでの威勢はどこへ行った？」
スパイダーは唇（くちびる）の端をニヤリと上げたが、牙がギラリと開いたようにしかようにしか見えなかった。

そこからはスパイダーの独壇場だった。

粘りつく糸の上で動きが自由にとれない万太郎にタックルし、糸でからめて柱にぶつけ、またリングに引き戻してボディプレスを見舞った。

「ぐうっ…ううっ」

フラフラの万太郎をまたリング外のクモの網の中に放り出し、地面に向けて突き落とした。

そして鉄剣スレスレで糸で吊るして止めてまた引き戻してヘッドバットをくらわせた。

クモが獲物を弱らせるように万太郎の身体を弄んだ。

「万太郎ー！　万太郎がんばれ〜！」

ガゼルマンが声をかけるが、万太郎の反応はどんどん鈍くなっていった。

「ダメか……万太郎もここまでか」

正規軍の中に諦めの空気が広がっていた。

そんな中、無派閥層のマグネットンが複雑な思いで試合を見つめていた。

(こんなところで終わるのか…万太郎！)

万太郎の追放は認めたものの、マグネットンは心にしこりを感じていた。

あの男が悪行超人であるはずがない。スパイダーの方がずっとそう見える——。

マグネットンは万太郎の強さを身をもって知っている。万太郎が戻ってきたことが正直嬉し

かった。いまは派閥抗争から抜け出て、ひとりの正義超人として万太郎を応援したい気持ちだったのだ。
だが万太郎はもう戦える様子ではなかった。
万太郎はいまやスパイダーの糸で操られる傀儡のようだった。
スパイダーは万太郎を糸でグルグル巻きにして、クモの網の中心に縛りつけた。
そしてカサカサと万太郎に近づいた。
「…そろそろ楽にしてやろう、万太郎」
スパイダーは万太郎の顔の前で口を開けた。クモの食事は牙から捕まえた獲物に毒液を注入して、肉をドロドロに溶かしてチューチューと吸い取る。
万太郎は残りの力で精いっぱい抵抗したが身体は完全に糸で縛りつけられていた。
「くそっ…動けない…」
万太郎の顔の前に、牙がクワッと持ち上がった。
「うっ、うわ――――!」
万太郎は叫んだ。
その時、リングの外の鉄柱が見えた。
(……これだ!)

万太郎は声をかぎりに叫んだ。
「マグネットン———！　柱に磁力をくれ———！」
「なんだと!?」
マグネットンは驚いた。
「お前の力で、その柱にありったけの磁力を通してくれ！」
試合に直接手助けをくだすのはルール違反だ。だがリング設備に触れるのはまったく問題ではない。
だが鉄柱に磁力を通すことが一体何の解決になるのか？
その真意を図る前に、マグネットンは毅然と言い放った。
「悪行超人の疑惑が解けない以上、お前の手助けをするつもりは無い！」
「そっ…そんな～」
ちょうどその時。
セイウチンが息を切らせて試合場のリング下に戻って来た。
「はあはあ…みんな聞いてよ！　スパイダーこそ悪行超人なんだ！」
「なんだって!?」
ファクトリーの正義超人たちが全員、セイウチンを見た。

「あいつが自分と万太郎さんのアイアン・スエットを入れ換えたんだ！」
「ふん！　証拠も無しに何を言うか！」
スパイダーが言い返す。すると万太郎が叫んだ。
「いま見せてやる！　マグネットン！　頼む！　磁力をくれ！」
マグネットンは迷った。
みんなが一斉に、セイウチンやガゼルマンや、正義超人みんなの魂がかかってるんだ！
万太郎は続けて言った。
「この試合、キッドやセイウチンからマグネットンを見た。マグネットンは動かない。
絶対に、絶対に負けられないんだよ！」
「…………」
「頼むよ、マグネット―――ン！」
するとマグネットンはスックと立ち上がった。
そして万太郎が捕まっている一番近い場所の鉄柱をハッグする。
スパイダーが忌ま忌ましそうに言った。
「マグネットン…どこまでも私の期待を裏切るつもりだな」
マグネットンは言い返した。

「俺は一度、万太郎に助けられてる。…その借りを返すだけだ」
マグネットンは頭のコイルを右に高速回転させた。
高い磁力パワーが、鉄の柱に伝導してゆく。柱の周囲がブゥゥンと歪んで見えた。
「うっ…なんだ？　引っ張られるぞ!?」
正義超人たちの多くが、なぜか鉄の柱に引っ張られた。
「うぉおおお――！」
マグネットンはさらにコイルの回転をあげた。その時――。
バリッ――バリバリッ、バリッ。
万太郎を包むスパイダーの糸の束が少しずつ千切れ始めた。
「な…なにっ!?」
スパイダーの驚きの声をよそに、万太郎の身体は糸を引きちぎってフワリと宙に浮いた。
「た――！」
万太郎は宙をクルリと回転して、マグネットンが磁力を伝導させた柱に吸いよせられるように張りついた。そして柱に背中をくっつけたまま、万太郎は言った。
「これが本当のアイアン・スエットだよ」
「………!!」

万太郎の身体には、尋常ではない鉄分量のアイアン・スエットが備わっている。近くで巨大な磁力パワーが発生すれば強く吸いよせられる。
正義超人としての特性を利用したのだ。
一方、スパイダーは——セイウチンが叫んだ。
「見ろー！　正義超人は柱に吸いよせられるのに、あんな近くにいてスパイダーは何ともない！　あいつにはアイアン・スエットが無い証拠だ——！」
ファクトリーが一瞬凍った。革命軍の大将が悪行超人だったのだ。
いま、スパイダーの正体が暴かれた。
スパイダーは目を伏せて低く笑った。そして顔を上げた。
眼が白目だけになっている。その様相はもう正義超人のものではなかった。
「その通りだよ！　私こそ新世代悪行超人〝アラクネ〟だ！　ファクトリーの内部から正義超人どもを一掃すべくやって来た！　ここまでの騒ぎはすべて私が仕組んだことだ！」
万太郎は柱を登り、その頂上にスックと立った。
スパイダー——いやアラクネは万太郎を見上げながら言った。
「だがいまごろ気づいてももう遅い！　キッドは瀕死、正義超人のリーダーとなる万太郎もいまここで私の毒牙に倒れるのだ！」

「それはどうかな」
万太郎がスッと手を広げた。
「…マンタ－ロ」
最初にコールしたのはセイウチンだ。次にガゼルマン、ジ・アダムス。
「マンタ－ロ、マンタ－ロ」
続いてマグネットン。正規軍。無派閥層。
そして革命軍の正義超人たち。
試合が中継されている手術室で、いま救命手術中のキッドも呟いた。
「…マン、タ－ロ…」
ファクトリーの正義超人たちの、若く勇気あふれる声がひとつになった。
「マンタ－ロ！　マンタ－ロ!!」
「マンタ－ロ!!　マンタ－ロッ!!」
「マンタ－ロ－ッ!!」
正義超人たちの万太郎コールは天に上ってゆくかのように、ファクトリーを揺るがした。
万太郎は言った。
「みんなの応援があるのに、ボクは負けられない」

「ほざけ――――!」

アラクネは大きくジャンプして万太郎に飛びかかった。

万太郎は鮮やかな宙返りでかわし、クモの巣の足場糸に着地した。

その反動でまた天高く舞った。そこにアラクネがいた。

万太郎のヘッドバットがアラクネの脚の一本をへし折った。

「ぐわぁっ!」

万太郎は粘る横糸を避け、足場糸だけを巧みに使い空中ジャンプ攻撃を繰り返した。

その姿はクモをついばむハチドリのようだった。

「…おのれ〰〰〰!」

アラクネが吐き出す糸も、万太郎コールを受けてパワーが完全復活した万太郎には当たらなかった。

仲間たちの声援を受ける。声援を追い風に万太郎はさらに高く舞う。

「スパイダー…いやアラクネッ、覚悟しろ!」

万太郎はジャンプ中にアラクネの首をホールドした。

そのまま首と肩を支点に自分の身体を天につき伸ばし、アラクネの身体とともに宙高く飛んだ。

一瞬、地上50メートルほどの高さでふたりの身体が止まった。
万太郎はアラクネのブラつく両足をガッチリ掴み、落下に身をゆだねた。
景色が消える。
空気を切り裂く音がする。
時速は300キロを越える。
アラクネはまったく逃げられない。
ガゼルマンが、セイウチンが、ロビンマスクや伝説超人たち、正義超人たちが叫んだ。
「あ…あれはっ!!」
《キン肉バスタ――――――ッ!!》
最強にして完璧。キン肉一族にしか使えない宇宙最高の必殺技である。
万太郎はアラクネにキン肉バスターをかけたまま鉄柱の頂上に落下した。
ドォォオオオンンンンン!!
太く重い鉄柱が、数メートル分も地面にめりこみ、ビキビキとヒビ割れた。
そして万太郎はアラクネを放し、リングにスタッと降りた。
アラクネはピクリとも動けず、崩れる鉄柱の破片とともに鉄剣の絨毯の上に落ちて行った。
ザクザクザクッ…嫌な音とともにアラクネの全身は鉄剣に貫かれた。緑色の体液がドロリと鉄

剣から伝い落ちた。

そこでゴングが鳴った。ロビンマスクが叫んだ。

「キン肉万太郎の勝利———！　ここに万太郎のファクトリーへの復帰を認める！」

万太郎は雄々しく腕を上げた。呼応するようにファクトリーは大歓声に包まれた。

万太郎はリングを降り、クシ刺しになっているアラクネに近寄った。

アラクネはもう虫の息の状態だった。それでもなんとか言葉を発した。

「…なぜだ…絶対に私の方が勝てたはず…お前のその強さの秘密は…何だ？」

「ボクは強くなんてないよ。仲間の魂と一緒に戦ったから勝てたんだ」

「…………」

「アラクネが地球にいる悪行超人たちの仲間のために、ここに来たようにね」

「…万太郎…」

「お前は強かったよ。また戦おう」

万太郎は戦いを労うように、折れ曲がったアラクネの脚をそろえた。

この男と、最後に戦えてよかった——アラクネはわずかに微笑んでみた。

これほどダメージを受ければもう二度とアラクネは戦うことは出来ないだろう。

万太郎はアラクネのファイトに敬意を払い、そっと目を伏せた。

そこにセイウチンとガゼルマンが駆け寄ってきた。
セイウチンは泣いている。
「やったやった万太郎さ〜〜〜ん！」
ガゼルマンは万太郎の肩をガシッと抱いた。
「よくやったぞ万太郎！」
そして正規軍、革命軍、無派閥層入り乱れて万太郎の側にドッと駆け寄った。
「万太郎！　万太郎!!」
「万太郎スゴいぞ！」
その中、マグネットンが照れくさそうに近寄った。
「よく勝ったな。さすがだぜ」
「マグネットンのお陰さ。それだけじゃない。みんなの声、そしてキッドの魂…それがなけりゃあんな強敵に勝てなかったよ」
万太郎はマグネットンと固く握手した。
すると万太郎は気が緩んだのか、いきなり泣きベソ顔で言った。
「でも本当はメチャクチャ怖かったよ〜〜〜っ。あんなのともう二度と戦いたくないよ〜〜〜〜！」

正義超人たちはカクッとなった。すると万太郎は仲間たちからバンバン叩かれまくられ、モミクチャにされた。
「しっかりしろよ万太郎！」
「まったくお前はいつまでもキリッとしねえな！」
「おわ〜！　イタい痛いやめてくれ〜〜〜！」
ロビンマスクやバッファローマンら伝説超人たちは満足げな顔で、万太郎の勝利を見守っていた。ロビンマスクが呟いた。
「あいつは親父を越えるかしれんな…」
万太郎は自分をいつまでもバカボコと叩いてる仲間たちに情けなく叫んだ。
「痛〜〜〜い！　もう叩くなってば———！」
ファクトリーを見下ろすシンボル像の下、万太郎たちの若い声はどこまでも遠く響いていった。

終章 再スタート



受話器を持つビビンバの声は、嬉し涙で震えていた。
「そう…わかりました。…ありがとう…」
電話の向こうのロビンマスクも、願っていた結果を報告できるのを嬉しく思っていた。
ロビンマスクは安心した声で言った。
「万太郎は見事だったよ。仲間たちの信頼をかち得て、最後は自分の力でアラクネを倒した。君たちにも見せてやりたかったよ」
ロビンマスクはヘラクレス・ファクトリーを混乱に陥れた、悪行超人アラクネが発端の派閥抗争の終焉を静かに報告した。
その最大の功労者はニューリーダー、キン肉万太郎。
スグルとビビンバが待ち焦がれた最高の吉報だった。
ビビンバは声を震わせながら言った。
「あんなに弱くて…甘ったれでだらしなくて我がままで…キン肉マンのダメなところばかり似てる子供だった、あの万太郎が…。そんなに強くなったなんて…」
ビビンバの隣にいたスグルがさすがにムッとなった。
ロビンマスクがビビンバに答えた。
「君たちの息子はもう立派な正義超人さ。悔しいが私たちの時代も本当に終わったんだと実感

させられたよ」

「…そうかもね……。イヤだ、ゴメンなさい…」

ロビンマスクの軽口に、ビビンバは堪えきれず堰を切ったように涙をボロボロと落とした。

しゃべれなくなったビビンバの代わりにスグルが電話に出た。

「すまんなロビンマスク。ビビンバは万太郎がファクトリーから追放されてから、ロクに寝ていないほど心配してたんじゃ」

「お前もそうじゃないのか？」

「ワシはキン肉星の大王じゃ。もっとデーンと構えておったさ」

「そりゃ頼もしいな」

「当然じゃよ。前にも言ったろう？　ワシは万太郎を信じておるとな」

親友に息子の自慢話をするスグルの顔は本当に嬉しそうだった。

そしてスグルは付け加えた。

「まあしかし、時代はあの子たちのモノでも昔のワシにはまだまだかなわんじゃろうて」

ロビンマスクはフフッと笑って言った。

「どうかな、あの子は素質だけならキン肉マンより上かもしれないぞ」

「なにっ……そんなにスゴいの？」

「これからの訓練次第さ。私たちが今後も責任持って鍛えてやる」
「お、おいっ。あんまりひどい目にあわせるなよ。まだ子供なんじゃから」
するとロビンマスクが笑いながら言った。
「息子に対してはまずお前が強くならないといけないんじゃないか」
スグルはエヘへと頭を掻いた。
そしてロビンマスクは用件だけを言って電話を切った。
その直後。
スグルはペタンと座り込んでワンワン泣きだした。
「よかった、本当によかったよ〰〰〰！　もしも万太郎に何かあったら…ワシは、ワシはどうしていいかわからんかった〜！」
「あなた…」
「オ〰〰イオイオイ！　オ〰〰イ〜オイオイ！」
スグルはビビンバの胸で、ブサイクな顔のままダラダラと泣き続けた。
ロビンマスクの電話の前では気丈にしていたが、実はビビンバの何倍も万太郎のことを心配していたのだ。
ビビンバはスグルの頭をそっと撫でた。

「私たち、いい息子を持ったわ…。あの子はキン肉マンに負けない最高の正義超人よ」
ビビンバの胸の中で、スグルはいつまでも泣きやまなかった。

ヘラクレス・ファクトリーのグラウンドに正義超人たちが集められた。
全員、頭と腕と足に鉄球を鎖でブラ下げている。今日は地獄の山岳マラソンだ。
ファクトリーの近くにある断崖絶壁や底無し谷もある険しい丘陵地帯を、鉄球をつけたまま一日中走りつづけるのだ。ファクトリーのメニューの中でも最も厳しく、多くの脱落者を生む地獄のトレーニングのひとつである。
鎖をジャラジャラと付けたまま正義超人たちはウォーミングアップを始めていた。
その中に万太郎はいた。
アラクネを倒し、無事にファクトリーに復学したのだ。
だが甘ったれで根性無しなのはまったく変わってなかった。
「あ〜ん、重いよ。やっぱりボクあのまま帰ればよかったよ〜〜〜〜」
万太郎の鉄球は他の正義超人よりも50キロも重い。成績の悪い正義超人への逆ハンデである。派閥抗争に終止符をうったヒーローだが、万太郎が成績最下位の落ちこぼれ生徒であるこ

とに変わりはなかった。

泣き言をブツブツ吐き、いつファクトリーから逃げ出すかわからない万太郎をなだめるのはいつも仲間の役割だった。

セイウチンとガゼルマンが相変わらず万太郎を励ましていた。

「万太郎さん、ファイトですよ！」

「アラクネとのバトルで出したバカ力を思い出せよっ」

「んなコト言っても～、あの時は夢中だったんだから」

そこに鉄球を軽々と引きずって来る男がいた。

「じゃあ進んで脱落するか？　もっとも、そんなのは俺が許さねえけどな」

短い金髪に優しいタレ目。左目の上に絆創膏、額に〝K〟のマーク──。

彼は笑っていた。

傷の癒えたキッドだった。

「き…キッド!!　もうトレーニングに出られるのっ!?」

「ああ、いつまでも寝てられねえからな」

キッドは文字通り超人的な体力と父親ゆずりの精神力で、一時は瀕死に陥った大ケガもほぼ完全に回復させていた。

キッドの言うとおり、ファクトリーの修行期間は三カ月と決まっている。卒業試験まであと一カ月弱しかない。立派な正義超人と認められ、地球赴任を任命されるには悠長にベッドの上で寝ている暇などないのだ。

キッドは笑顔を見せながら万太郎に言った。

「アラクネに勝ったらしいけど…それで俺より実力が上だなんて思うなよ？」

万太郎も笑いながら返した。

「そっちの方こそ、ボクがキッドを助けたいからファクトリーに戻ったなんて思わないでよね。ただ手帳の女の子を紹介してもらいたかっただけなんだから」

不器用な男同士の、感謝の言葉の交換だった。

しかし、新たなケンカのタネでもあった。

「あ…ドコに行ったかと思ったらあの手帳お前が持ってたのか!?」

「あっ、ヤベ」

「この野郎、万太郎〜！」

キッドが掴みかかろうとしたその時、バッファローマンの号令がかかった。

「みんな用意はいいか！　地獄マラソン開始！　レディ、ゴ――――!!」

万太郎は号令とともに、鉄球をものともせずダッシュした。
「逃げろ〜っ！」
続いてキッドが追いかける。
「待て万太郎〜！　手帳返せ〜〜〜〜！」
「ゴメ〜ン！　全員に電話かけ終わるまでもう少し貸してて〜！」
その後を、笑いながらセイウチンとガゼルマンも走った。
「まったくもう…」
「万太郎には負けるぜ」
そして正義超人たちが一団となってマラソンを始めた。無数の鉄球が地面を削り、地鳴りのような音がファクトリーに響いた。
このトレーニングで何人の正義超人が脱落するのか。
正義超人たちの自分の限界への挑戦は卒業の日まで続く。
ヘラクレス・ファクトリーにいま残っている正義超人は１５０人ほど。
キン肉万太郎。
テリー・ザ・キッド。
セイウチン。

ガゼルマン。

若き正義超人のリーダーたち。

その誰もが生き残るかもしれないし、誰かが、あるいは4人とも脱落するかもしれない。

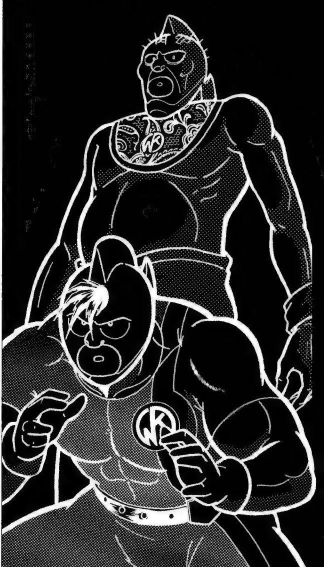
いずれにせよ卒業試験を通過して地球赴任が決まるのは10人程度だ。

狭き門を通過すべく、次代の正義超人たちは仲間と共に走った。

新世代正義超人となるために――。

伝説の序章

～前夜～



その日、キン肉星は祝賀の声に包まれていた。
キン肉星第58代の大王キン肉スグルと王妃ビビンバの間に嫡男が生まれた。ふたりの結婚から14年、待望の時期王位継承者である。王室宮廷だけでなくキン肉星に暮らすすべての人々がお世継ぎ誕生に沸き上がっていた。
一方、スグルとビビンバは祝賀の喧騒から離れて王室に作られた子供部屋で、親子3人の幸せな時間を静かに嚙みしめていた。
赤ちゃんはビビンバの腕の中でキョトンと目を開けている。サラサラの栗色の髪に父親ゆずりの美しい顔だちの男の子だった。スグルは嬉しそうに微笑みながら、その柔らかい頰をそっと撫でた。
「なんて可愛いんじゃ…マスクをしてしまうのがもったいないわい」
赤ちゃんの素顔を見られる時間はそれが最後だった。スグルは名残惜しそうに、何度も何度も顔を撫でてあげた。スグルはマスクを取り出した。キン肉星王族の定めにより、王族はマスクを被って暮らさなくてはならない。マスクは父スグルと同じ厚いクチビルに丸い鼻、後頭部を守るキン肉カッターがある。ひとつ違うのは被った時に前髪が出る隙間があった。
スグルは赤ちゃんにマスクをかぶせ、しっかり後頭部の紐を縛った。キン肉カッターを取り付けると赤ちゃんはスグルとそっくりの顔になった。

スグルは赤ちゃんを高く抱き上げた。
「お――っ、よく似合うぞ万太郎」
赤ちゃんの名はキン肉万太郎。キン肉マン・タロウではなく万太郎だ。
スグルは心の中で呟いた。
（キン肉族の戦士、キン肉マンII世の誕生だ！）

万太郎はスクスク育っていった。5歳になったある日。
スグルはトレーニングルームに初めて万太郎を連れてきた。40歳を過ぎ、熟年の歳を迎えようとした身体だがスグルは日々のトレーニングを欠かしていない。年齢からは想像できない立派なボディを維持していた。
トレーニングルームにはレスリングリングがある。スグルは万太郎を肩に乗せて話した。
「万太郎、ここがリングだよ。我ら超人が生涯の大半を過ごす場所だ」
万太郎はキョトンとしたまま訊いた。
「ここで父上たちがむかし戦ってたの？　…意外と小っちゃいんだね」
スグルはハッハッと笑って答えた。
「確かにな。縦横6メートル50センチの正方形のキャンバスは、巨体の超人たちが死闘を繰り

広げる場所としては狭く見えるかもしれない。だがな、ここは宇宙なんだよ」

「…宇宙？」

「リングにはキャンバスだけじゃない。コーナーもポストもあれば、ロープも鉄柱もある。外から凶器を持ち込むのは反則だがリング上にあるものなら何を使っても合法だ。ロープの反動を利用した攻撃はもちろん、コーナーポストからの攻撃も、鉄柱攻撃も何でもＯＫだ。そう考えると小っちゃいリングが何倍にも広く感じられ、無限の宇宙に見えるのさ」

「…ふーん」

まだ5歳で、リングにも立ったことのない万太郎にはまだ難しい話のようだった。

「このリングには何だってある。仲間との絆、人の優しさ、愛情、そして超人としての本当の強さ…生きてくうえで一番大事なことを、父上はみんなこのリングから学んだんだよ」

万太郎はスグルを見て訊いた。

「キズナって何？」

「友だちがいて、お互いを大事に思う気持ちだよ。それがあればどんな相手にでも立ち向かえた。私より強い悪魔超人はいっぱいいたけど仲間との絆があったから怖くはなかったよ」

「へえ……」

過去の闘いを誇らしそうに振り返るスグルを万太郎はスゴいと思っていた。いつか父上みた

いになりたいと、その時は考えていた。
「いつか万太郎も、このリングでいろんなことを学んでくれると父上は嬉しいな」
「うんっ。ボク、いつか父上みたいに強くなる！」
スグルは嬉しそうに万太郎の頭をクシャッと撫でた。
しかし時は泰平の時代。正義超人たちが命を賭けて闘う時代ではなくなっていた。

それから7年——万太郎は12歳になった。ジュニア・スクールの最年長である。
マッスルガム宮殿の子供部屋では、スグルと万太郎の遊ぶ声が響いていた。
「えいっ！　たー！」
「イテテテ！　おわ〜はっはっは、いいぞ万太郎！　もっと右を狙え！」
スグルは胸に得点板をぶら下げ、万太郎が投げるゴムボールの的になっている。万太郎は手加減なくゴムボールをスグルに投げつけ得点遊びをしていた。
万太郎はワガママに育った。本来なら厳しくトレーニング漬けの日々を送らせるはずが、この平和な時代に万太郎を戦士として鍛える必要は無かったのだ。
また万太郎はスグルが歳をとってから出来た一人息子、トレーニングをしないとなればネコ

可愛がりでかまってやる時間が増えた。スグルは万太郎の言うことは何でも聞いてやった。欲しいものは何でも買い与えたし、叱ったことも一度もない。何不自由のない暮らしをさせていた。かつて正義超人たちが過ごしたストイックな生活とは正反対の生活を送らせていたのだ。

そのうえスグルの身体は歳をとるごとに急速に衰え、逞しかった筋肉ボディはもう見る影も無くなっていた。

万太郎はすっかりスグルへの尊敬を失い、まるでよく言うことをきくオモチャみたいに思っていた。

万太郎は突然、ゴムボールをポイッと後ろに投げて呟いた。

「飽きちゃった」

するとスグルはススッと万太郎にスリ寄って言った。

「そ、そうか？　じゃあ次は何をする？　テレビゲームか？　ドライブにでも行くか？　好きなものを言いなさい、何でも用意してやるぞ」

「いらないっ。宿題しなきゃ」

そう言って万太郎はプイッと勉強机に座った。そしてスグルに背を向けたまま、ぶっきらぼうに言った。

「もういいよ父上。出てって」

「…あ、ああ。じゃ頑張ってな」
スグルは寂しそうに子供部屋を出ようとした。すると万太郎が言った。
「そうだ、母上にカルビ丼作ってって頼んどいてよ」
スグルは子供部屋を出て、パタンと戸を閉めた。
トボトボと廊下を歩いているスグルを見てビンバが言った。
「またボーヤに追い出されましたの？」
「…うーむ。おい、万太郎にカルビ丼を作ってやってくれ。大盛りでな」
ビビンバは困ったようにアゴに指を置いた。
「キン肉星の大王が息子の伝言番ですか～？　情けないわねぇ」
「ふう。コレじゃあナメられても仕方ないからのう…」
スグルはたるんだ腹の肉をブニュ～と摑んでそう呟いた。
かつて宇宙の平和のために勇敢に戦ったスグルだが、万太郎はその偉大な事実をまったく信用していなかった。というのも記録が無いのだ。
万太郎が生まれるかなり前は、スグルと悪魔超人の闘いを記録したビデオテープや記事が数多く保存されていた。しかし王位争奪サバイバルマッチが終わった後、スグルはそれらをすべて焼却してしまった。その理由は〝自分の闘いは記録されるためにあるんじゃない、宇宙の平

和のためにあるんだ〃と。

それには後年、いつか生まれるであろう息子に戦士として余計なプレッシャーを与えたくない親心があったのだろう。

だが記録が無いせいで万太郎はスグルを偉い正義超人だとこれっぽっちも思っていなかった。ドジで、マヌケで、歳をとったどこにでもいる頼り無い父親…それだけの存在だった。

スグルは寂しそうに深～いため息をついた。

ジュニア・スクールに下校時間のチャイムが鳴った。

6年生の教室では超人の同級生、ガータとカシマとタミノが帰り支度をしていた。

「おい、この後どうする？」

「アクトパークでサッカーしようぜ！」

「でも人数は？　今日は塾に行く子が多いからそんなに集まらないかも」

「万太郎は…？」

するとガータたちはフッと万太郎を見た。万太郎はワザと無視するように、黙々と教科書をバッグに詰めている。明らかに予定は無さそうだが。ガータはつまらなそうに言った。

「アイツはいいよ。どうせ来やしないって」

万太郎はワガママな性格のせいで友だちがほとんどいなかった。また、あのキン肉大王の息子というだけで、同級生たちには敬遠の対象となっていた。
ガータたちは「行こうぜ」と万太郎を放って教室を出て行った。
「フンッ……」
万太郎は強がるように鼻を鳴らしてバッグを持った。万太郎は友だちが欲しくないのではなく、作り方がわからないのだ。小さい頃は広い宮廷でトマスやダッツなど召使い超人が遊び相手になってくれたし、自分から仲間を作る努力をしたことがなかった。いわゆる人付き合いベタなのだ。
万太郎は一人で校舎を後にした。
「べつに寂しくなんかナイや…」
帰り道の途中、アクトパークの前を通った。帰宅ルートではないが同級生たちが楽しそうにサッカーやレスリングをやっているのを遠くから眺めるのが日課のようになっていた。
本当は混ぜてほしい——心の底ではいつもそう思っていた。
するとその日、パークの中が騒ぎになっていた。
「ふざんけんじやねぇ！　どうワビ入れるつもりなんだよガキども！」
騒ぎの中心にガータたち3人、それを大柄な6人の少年たちが取り巻いていた。万太郎は植

樹の後ろに隠れ、様子を見た。
「あいつら、シンズたちだ！」
取り囲んでいる少年たちの中に、ダボダボのパンツにパーカー、グレーのニット帽をかぶってガムをクチャクチャ噛んでいるリーダー格の少年がいた。万太郎たちの上級であるジュニア・ハイスクールの不良生徒のシンズだ。
シンズは不良仲間たちを集め、学校の内外を問わず至る所で問題行動を起こしている。下級生から金を巻き上げたり車を盗難したり、ガラスを割ったりペットをケガさせたり…キン肉星には珍しい不良グループだった。
見たところ、ガータたちの蹴ったサッカーボールがシンズ軍団の一人に当たってしまい因縁をつけているようだった。シンズはガータの襟首をつかんですごんだ。
「てめえワザとだろ？　ああ？」
「そっ、そんな…違います！　ゴメンなさい、許してください！」
ガータはブルブル震えて許しを乞うた。しかしシンズはガムをブッと吐いてニヤリと笑った。
「だったら慰謝料だせよ。わかるだろイシャリョー？　精神的、肉体的苦痛に対するお詫びのシルシ。金で誠意を示せって」

「そんな…お金なんてありません」
「じゃあお前ら、これからこのパークで安心して遊べなくなるなあ？」
するとシンズの仲間たちはヘラヘラと笑いだした。カシマとタミノはどうすることもできず震えて立っているだけだった。シンズはさらにガータの首根っこを絞め上げた。
「どうすんだよ、小僧っ！」
「ひっ……」
ガータが泣きだしそうになったその時。
「やめろ～～～～～！」
万太郎がシンズにタックルした。
「うおっ!?」
シンズは弾丸のような突進を受けて、一気にフッ飛んだ。万太郎はまったく身体を鍛えていないのに、筋肉で覆われて体格だけは立派だった。まだ華奢な身体のシンズではとても受け止められない。
シンズは仲間に助け起こされた。万太郎は自然と、アゴを引き肘と腕を盾にしてガードポジションをとっていた。その万太郎に向かってシンズは睨みながら言った。
「いきなり何しやがんだ、このブタ顔野郎…」

「ぶっ、ブタ顔野郎!?　気にしてるのに〜…ひどいっ！」
友だちでもないガータを助ける理由は無かった。ただ、同級生が悪いヤツらにイジめられているのを見過ごすことはできなかった。正義超人の血が万太郎の身体を勝手に動かしていた。
シンズの子分が万太郎を見て小さく耳打ちした。するとシンズはいきなり卑屈に笑って、万太郎に言った。
「へえ…あんた大王の息子かよ。コイツらの代わりにいっぱい金をくれるってのか？」
「ふっ、ふざけるなっ。お前らなんかにやるか！」
「じゃあやり返させてもらうかな」
万太郎はシンズの仲間たちにズラリと囲まれた。逃げ場は無くなった。
「俺たちは大王の息子だろうと何だろうと容赦しないぜ」
シンズがクイッとアゴをしゃくると、シンズ軍団が一斉に万太郎に殴りかかった。
「うお〜〜〜〜〜〜〜!!」
「わっ……！」
すると万太郎の身体が一瞬沈んだ。シンズ軍団のふたりが避けられた恰好で、ゴチンと正面衝突してノビた。万太郎は次に軽やかなフットワークでシンズ軍団の3人がかりのパンチやキックをかわしつづけた。

「なんだコイツ⁉　ボクサーか！」

万太郎のフットワークに乱され、シンズ軍団は勝手に転んだり同士討ちパンチになったりで、ひとりが勝手にノビてしまった。残ったふたりのうちひとりが万太郎を背中からはがい絞めした。

「く、くそっ！　離せ！」

「くたばれ〜〜〜〜〜！」

そこにもうひとりのシンズ軍団が万太郎の腹を目掛けて回し蹴りしてきた。

「…はあっ！」

万太郎は素早いヒールキックではがい絞めしていた相手の股間を蹴り上げ手をほどいた。そして腹に向かってきたキックの足をガッチリ捕らえ、身体を回転させて体重を乗せながら地面に倒れこむ。ヒザを粉砕するドラゴン・スクリューである。ゴキッというイヤな音がした。

「うぎゃあっ⁉」

「このガキ〜〜〜〜〜！」

そして後ろにいたシンズ軍団のひとりが万太郎にタックルしてきた。

「ふんっ！」

万太郎はその頭をホールド、同時に相手の左モモの下から相手の右手首を掴んでタックルし

てきた勢いを利用して後ろに身体をブン投げた。高難度の投げ技、ワンハンドクラッチ式エクスプロイダーである。投げられた相手は背中と頸椎を地面に叩きつけた。

「うぐぅはっ…!!」

あっと言う間に5人のシンズ軍団が地面に大の字になってしまった。

一人残ったシンズは驚いた顔で、万太郎に言い放った。

「てっ、てめえ…これで済むと思うなよ!!」

そしてシンズは風のような速さで逃げていった。

その後ろ姿を見送って万太郎はペタンと座り込み、じっと手を見つめた。

「ぼ、ボクにこんなコトが出来たなんて…」

最も驚いたのはシンズではなく万太郎本人だった。格闘経験がまったく無いのに、不良たちが全然かなわなかった。これも正義超人〝キン肉マン〟の遺伝子が成せるワザだったのだ。

だが想像したこともない自分の強さを知った時、万太郎が感じたのは「恐怖」だった。

「こ、コワいよ〜〜〜〜〜〜!」

万太郎はジョ〜〜〜〜〜ッとオシッコを漏らしてしまった。万太郎の情けない泣き声がパークに響きわたる。

万太郎を泣かせた理由はもう一つあった。せっかく助けたガータたちが、いつの間にか礼も

言わないで逃げてしまっていたのだ。

万太郎が投げたシンズ軍団の一人は鎖骨を折る重傷を負ってしまった。いかに先に仕掛けられたとはいえ、同年代の子供である。さっそくケガした本人の両親が夫婦揃ってマッスルガム宮殿に抗議にやって来た。

「いくら王子とはいえ行き過ぎです！　あんな暴力が許されるとお思いですか!?」

「お怒りはごもっとも…誠に、まことに申し訳ない。万太郎にはキツく言っておこう…」

スグルは玉座から降り、平民の夫婦にひたすらペコペコと頭を下げつづけていた。

その様子を万太郎はコッソリ覗き見ていた。

(悪いのはアッチなのに…何で父上が頭を下げなくちゃならないんだ？)

何も言い返さず謝ってばかりのスグルがひどくカッコ悪く見えた。威厳も無いし、強くも頼れるところもない。何が伝説の正義超人だ。あんなにカッコ悪い大人は見たことがない。

万太郎はスグルが大嫌いになった。

(「万太郎にはキツく言っておこう」だなんて…何にもわかってないくせに！)

また助けたはずのガータたちに裏切られた思いが万太郎を押しつぶしていた。

行き場のない苛立ちが万太郎の中をグルグル駆けめぐった。

そして万太郎は自分の部屋に閉じこもってしまった。

「万太郎、万太郎？　ボーヤ？　頼む、顔だけ見せておくれ」

「…うるさい!!」

スグルは部屋の中から聞こえた万太郎の強い声にヒッとなってドアから飛びのいた。そして辛そうにため息ついた。

「あ〜あ…こういうとき父親はどうしてやればいいのかのう…」

そこにビビンバがやって来た。カルビ丼を載せた盆を持っている。

「おどきになって、私が話してみます」

「び、ビビンバ〜」

スグルは情けない声でビビンバにすがった。ビビンバはポンと胸を叩いて言った。

「男の子同士のモメ事は案外、母親の方が話しやすいものですよ」

そう言ってビビンバは万太郎の部屋のドアをノックした。

「万太郎、私ですよ。カルビ丼を持って来たわ。入れてちょうだい」

すると無言でドアがスッと開いた。ビビンバはスグルにウインクしてから部屋に入った。

万太郎はベッドにうつ伏せで寝ていた。ビビンバはカルビ丼を机に置いて、そっと万太郎の

傍に座った。先に話しだしたのはビビンバだった。
「父上がとても心配なさってるわよ。万太郎にケガは無いのかって」
「あんなダメ親父！　大っ嫌いだっ」
　ビビンバは万太郎の怒りをそのまま受け止めるように、優しく微笑んだ。
「そんなこと言うものじゃありません。あの方はとっても立派な大王なんですよ。かつて宇宙最強の正義超人で、すべての人が彼を尊敬していたわ」
「ボク、それが信じられないんだ。あんな情けない父上が本当に強かったの？」
「本当よ。でもね…〝キン肉マン〟が強かったのは仲間がいたから。テリーマンにロビンマスクにウォーズマン、ミートにバッファローマンにブロッケンJr.…命を賭けて守れる仲間がいたからキン肉マンは誰よりも強く闘えたのよ。あの絆の強さは女の私が妬ましくなるぐらいだったわ」
「…………」
「あなたにも信頼しあえるお友だちが出来れば、きっとわかるわ」
「そんなのいらないよっ！」
　万太郎は顔を上げてイライラをぶつけるように言った。
「ていうか父上が気に入らないだけっ！　ヘコヘコ頭下げてさっ。カッコ悪いよ、最低だよ！

あんなの伝説の正義超人じゃないよ！　あれじゃボクが悪者みたいじゃないか…」
　万太郎はバフッと枕に顔を埋めてしまった。スグルに向けた怒りは、ガータたちに裏切られたことの八つ当たりが大部分だった。自分でもわかっている。しかし「そんなの気にすることないじゃん」と割り切るには、万太郎はまだ幼すぎるようだった。ビビンバはクスッと笑いながら万太郎の頭をそっと撫でた。
「父上は今回の事、決してあなたを責めたりしないわ。男の子同士の喧嘩なんてあって当然だもの。先方のご両親に謝ったのだって、ちっとも本心なんかじゃないわよ。心の中では（万太郎が正しいに決まっておる！）って思いながら頭を下げてたに違いないわ」
「…そ、そうかな？」
　万太郎が見るとビビンバはイタズラっぽくウインクして見せた。
「あの方は何よりもあなたのことを大事に、そして誇りに思ってる。事を大きくしないため、あなたのために謝ったの。そんな父上に大嫌い、なんて言ったらいけないわ」
「………」
「さあ、冷めないうちにカルビ丼を食べなさい」
　そう言ってビビンバは部屋から出ていった。
　そのとき万太郎が食べたカルビ丼は今までにない複雑な味がした。

ジュニア・スクールに登校した万太郎は、徹底的にガータとカシマとタミノたちを無視した。

「あ、あのさ…万太郎…」

ガータたちは何か言いかけようと近寄って来るのだが、万太郎は一切眼中にないフリをしてプイッとどこかへ行ってしまう。

(逃げちゃう友だちなんて…ボクにはいらない)

自分でそうしておきながら、心の中がいっそう寂しくなるのを感じていた。

その日の下校時間、万太郎はいつものようにひとりで帰った。すると校門から、他の生徒たちが何かを避けるように走って帰っていく様子が見えた。

「なんだ…？　あっ!!」

校門のすぐ外にシンズ軍団がズラリと勢ぞろいしていたのだ。このまえ相手したよりも多く、10人を越えている。先頭に立っていたシンズがニヤニヤと笑いながら言った。

「待ってたぜ万太郎クン。この前はウチの子分が世話になったな」

万太郎はジリッと後ずさりしながら身構えた。

「…何の用だ」

「おっと。キミとやり合いに来たんじゃないんだよ。今日は交渉に来たんだ」
「なんだって？」
「あん時のケンカの腕、大したモンだったぜ。でさ、俺たちのチームに入ってくれよ」
そう言ってシンズは軍団の方をクイッとアゴで指した。どの顔も不貞腐れた、どうしようもない不良の集まりである。万太郎はため息まじりに言った。
「なにがチームだよ…何でボクが君たちとツルまないといけないワケ？」
「最近はここら辺も物騒でいろんなグループが来てるからな。俺たちもチームのパワーをアップさせたいワケよ。まあキミを新戦力としてスカウトしたいってことさ。大王の息子が味方になりゃ俺たちもだいぶハクがつくからな」
一番物騒なのは君だよと言いたかったが、相手の人数を考えて万太郎はグッと堪えた。
「もし断ると言ったら？」
殴られる、と思った。その時のためにダッシュで逃げる心の準備を整えた。
するとシンズはニヤッと笑って答えた。
「別にいいぜ〜。ちょっとばかり同級生が気の毒なだけじゃないか？」
「えっ…？」
「キミたち、卒業したらウチのジュニア・ハイスクールに入学するだろ。…まあ大変な学校生

活になると思うぜ」

シンズは誘いを断れば万太郎ではなく、同級生たちを標的にすると脅迫しているのだ。万太郎の通うジュニア・スクールからジュニア・ハイスクールへは基本的にエスカレーター式で入学が決まっている。つまりシンズ軍団たちがまだ在学しているうちに、万太郎の代の新入生が入って来ることになる。万太郎はギリッと歯ぎしりして言った。

「汚いぞ！　それでも男のやることかっ！」

シンズは万太郎にズイッと顔を近づけてスゴんで言った。

「うるせえ、こっちは恥かかされてんだ。どこまでも付きまとってやるからな」

シンズはクイッとアゴをしゃくって子分たちと去ろうとした。去り際に万太郎に言い捨てた。

「返事は今日の夜10時、アクトパークのレスリングキャンバスで聞かせろ。来なきゃ約束破ったってことで、てめえの同級生たちを全員病院送りにしてやる…待ってるからな」

去って行くシンズ軍団を万太郎は無言で見送った。

万太郎は迷った。仲間にしたいなんてウソで、シンズは自分をリンチにかけるつもりだ。行くべきか逃げるべきか…。逃げたらガータたち同級生たちが襲われる。

（フンッ…ガータたちがどうなろうと知ったことじゃないよ…）

そう思う反面、正義超人の闘争心がフツフツと煮えたぎっていた。
あんな悪い奴を放っておいちゃいけない。
友だちを見捨てたら絶対ダメだ。それが正義超人だと父上から教わったんだ。
あんなダメ親父でも、正義超人の教えは間違っていないと信じてる。
でも…。喧嘩はもうイヤだ。
万太郎は悩んだ。相反するふたつの思いが万太郎の中激しくで交錯した。答えはすぐには出なかった。
その一部始終を物陰からこっそりガータが隠れて見ていた。

シンズと約束の時。月光が眩しい夜だった。
アクトパークのレスリングキャンバスが青白い光に明々と照らし出されていた。昼間は子供たちがレスリングして遊ぶ場所だが、いまは不気味な静寂に包まれている。
リングの上には10人以上のシンズ軍団が立っていた。それぞれが鉄パイプに木刀、ヌンチャクや特殊警棒など武器を持っている。
金属バットを肩に担いだシンズがパークの入り口を見てニヤッと笑った。

「来たぜ……」
　現れたのは万太郎だった。ブルーの生地にイエローストライプ、リンググローブにシューズを履いている。闘いに向かう時のスタイルだ。月光に照らしだされ、美しいブルーのコントラストを浮かび上がらせている。
　万太郎はリングロープを摑んで、ヒョイッとキャンバスに下りた。そしてシンズの前に立ち、肩で大きく息をついて言った。
「返事を言いにきた」
「いいだろ。聞かせてもらおうか」
「お前らなんかの仲間にはならない」
「…そうかよ。これから同級生たちが可哀相だなぁ」
「それも許さない」
　シンズは不愉快そうにペッと唾を吐いた。
「アレもダメこれもダメ…喧嘩売るのが巧い王子サマだなぁ。これでも譲歩してやってんだぜクソガキ！　二度と調子づいたクチをきけなくしてやるぜ」
　シンズ軍団がズイッと前に乗り出した。万太郎は思わず尻込みした。シンズたちがジリジリと万太郎を囲む輪を小さくする。

同級生は見捨てられない。悩んだ末にそれが万太郎の出した答えだった。しかし、自分の身をどうやって守るかはまったく考えていなかった。

この人数を相手では逃げられない、そう悟った万太郎は小さく呟いた。

「…助けて…誰か」

その時、好々爺然とした声がした。

「いかんなぁ。リングに唾を吐くなんて感心せんぞ」

「えっ!?」

万太郎とシンズ軍団が一斉に声のした方を見た。

パークの暗がりからひとりの男性がヨロヨロと歩いて来た。でっぷり出た腹に痩せた胸板、ブタ鼻のマスク――スグルだった。

「だっ、大王!?」

「父上!!」

シンズ軍団はいきなりのキン肉星大王の出現にさすがに動揺を隠せなかった。

(なっ、なんでここに父上が…? もしかしてシンズ軍団を倒しに来てくれたの!?)

ところが突然、スグルはバッと地面に突っ伏して手をついた。

「スマン! 息子をカンベンしてやってくれ～!」

「あらっ」
万太郎はカクッとなった。スグルはシンズたちに土下座したまま言った。
「息子が君たちの友だちをケガさせたのは本当に悪かった。この通り謝る、じゃから万太郎を見逃してくれ〰〰」
スグルはグイグイと地面に頭をこすりつけた。万太郎は情けなくて思わず叫んだ。
「父上っ！　もういいよ帰ってよ、カッコ悪いってば！」
「…万太郎こそもう遅いから帰りなさい」
「ほっといてよ、これはボクの問題なんだ！」
「帰れと言っておるだろう!!」
万太郎はビクッとなった。今まで一度も聞いたことがなかった、スグルの迫力ある声だった。万太郎はブスッとなって言った。
「…どうなったって知らないからねっ」
万太郎はリングを降りて、スグルの言うとおりピューッと走って逃げてしまった。本心ではスグルが帰れと言ってくれてホッとしていたのだ。
万太郎を見送り、スグルはスッと立ち上がった。そして苦笑まじりに呟いた。
「やれやれ…逃げ足の速さはワシにそっくりじゃ」

シンズたちは武器をグッと構えて言った。
「子供のケンカに父親…それも大王が出てくるなんてカッコ悪いですね」
「ワシもそう思うよ」
スグルはグッとシンズ軍団を睨んだ。その目にはいつもの弱々しい様子は無かった。
正義超人の鋭い威圧感が宿っている。低い声でスグルは言った。
「じゃがな。悪い子らにお仕置きするのも王の務めじゃて」
「…ジジイがカッコつけんじゃねえ！」
いきなりシンズはスグルの頭めがけて横殴りで金属バットを振った。
ブゥン！　スグルはバットを寸前で見切り、頭をしずめた。そして瞬時にシンズの手からバットをもぎ取りシンズの腹にズンッと掌底を当てた。
「ぐっは……!!」
熟年の男とは思えない、的確で重い一打にシンズは思わずうずくまった。
「最近の若いモンは腹筋が弱っちいのう」
スグルは金属バットをポイッと捨てた――するとなんと、グニャグニャに曲がっていた。一瞬で、関節技をかけて金属バットを曲げてしまっていたのだ。
「なっ……！」

シンズ軍団にスーッと寒けが走った。スグルは飄々と肩と首をコキコキ鳴らして言った。
「ちょっとばかり痛い目を見てもらうぞ。…これも君らのためじゃて」

シンズ軍団が全員大ケガを負って入院したことを万太郎が知ったのは次の日だった。
万太郎は王室で呑気にほうじ茶をズズッとすすっているスグルに詰め寄った。
「父上！　あの後シンズたちといったい何があったの？」
「ん？　…知らんよ。ワシは土下座した後さっさと帰ってしまったからのう」
スグルは話をはぐらかした。万太郎は釈然としなかったがそれ以上追及するのをやめた。このダメ親父がシンズたちを叩きのめしたはずがないし…きっと本当に何も知らないのだ。この日以来、シンズたちはパッタリと不良行為をやめ軍団も解散した。
万太郎はそれだけ訊いて自分の部屋に帰ろうとした。
「待ちなさい、万太郎。言っておきたいことがある」
スグルが呼び止めた。万太郎は説教されるのだと思い、面倒くさそうに言い返した。
「……何だよ。小言なら短くしてよね」
「違うよ。ガータという少年は知っておるな、彼がアクトパークで万太郎たちの決闘があるの

を教えてくれたんじゃ」

「……!!」

驚く万太郎に、スグルは肩をポンと叩いて柔和な笑顔を見せた。

「お前は同級生を救いたくて闘おうとしたんだろう？　ワシは暴力は大嫌いじゃが、そんなお前を心から誇りに思うぞ」

「父上っ……」

万太郎はブワッと涙が出てきた。

勝手に危ない決闘に出向いて、叱られるはずなのにスグルは褒めてくれた。もし叱られていたらきっと暴れていただろう。仲間のために闘ったのに誰もわかってくれない――スグルは万太郎のやるせない痛みを理解してくれていたのだ。

それにガータたちは裏切ってなんかいなかった。後でわかったことだが、ガータたちは万太郎の隠れたパワーが怖くて近寄りがたかったのだ。万太郎を嫌ってはいない。友だちになる方法がわからないのはお互い同じだったのだ。

人のため、仲間のために闘うことが正義超人には何よりも大切なこと。肩に乗せた温かいスグルの手が万太郎にあらためてそう教えているようだった。

万太郎は涙をポロポロこぼした。スグルは何も言わず、ウンウンと頷きながら頭を撫でた。

ふたりの間にあった壁が消えていく瞬間だった。

「万太郎――！　シュートだ――！」

「任せろ〜〜〜！」

万太郎とガータ、カシマとタミノたちがアクトパークで元気にサッカーボールを蹴っていた。あれ以来、すっかり仲良くなって毎日学校が終わってからみんなで遊んでいる。

その様子をスグルとビビンバが目を細めて見ていた。

「何だかあの子、大きくなりましたね」

「うむ……ワシの背もそろそろ抜かれるんじゃのう」

最近万太郎が一緒に遊んでくれなくなり、スグルは寂しさを噛みつぶすようにそう言った。その一方で万太郎のスグルへの頑（かたく）なな態度はすっかり消えていた。相変わらず的当てなどのオモチャにはしていたが。

その時、いきなり万太郎の悲鳴が響いた。

「おわ〜〜〜！　たっ、助けて〜〜〜！　ぐるじい〜〜〜！」

万太郎がシュート直前、足をすっ転ばせてボールの代わりに自分がゴールに飛び込んでしまったのだ。ネットにからまり情けない態勢でバタバタともがいていた。

「何やってんだよ万太郎…………！」

ガータたちがネットをはがして助けている。スグルとビビンバは顔を見合わせて苦笑した。友だちに助けられながら闘いつづける万太郎の姿が、若い頃のスグルにだぶった。

悪行超人復活の2年前――キン肉マンとII世の短い平和な時間は過ぎていった。

あとがき

テレビアニメも絶賛放映中の『キン肉マンⅡ世』ノベライズ第1巻です。
旧作からの原作ファンで、初代タイガーマスク時代からのプロレスファンとしては執筆が楽しくないはずがない！　書きおわる頃には「まだ書きたいなぁ〜…」と残念がったり。作業を終わらせるのがもったいないと思った作品なんて初めてです。

さていきなりですが、私だけではないすべてのプロレス及び格闘ファンはいつも考えているでしょう。
「最強の男は誰か？」と。
でも現実の格闘の世界には団体ごとの面倒くさいルールや複雑な人間関係なんてのがあって、なかなかテストで一番取るみたいな客観的なトップが決められない状況にあります。
私は最強の格闘家とは「人の心を引きつける」パワーのある男だと思ってます。そういう意味では髙田道場の桜庭やＵＦＯの小川、Ｔ２０００の蝶野はかなり強いと言えるでしょう。

しかし世代を越えてすべての人の心をつかんで離さない最強のレスラーといえば…私はいまだにアントニオ猪木以外には誰もいないと思ってます。

「元気ですかー！」「1、2、3…ダァーッ!!」だけで何万人もの男たちをドーム会場のてっぺんまで熱狂させるなんて誰にもできない。総理大臣でもグラミー賞獲ったアーティストでも無理です。何なんでしょうあのパワーは？　言葉では絶対に説明できないパワーです。

万太郎にはあのパワーがあります。キッドや仲間たちの心を無条件で引きつける何か……。それはどんなに練習したって百連勝したって手に入らない最強の証です。万太郎みたいに人の心を動かすモノを持っている男が本当に強い男だと私は思います。

私はプロレスファンとして切実に願ってます。万太郎のような猪木を越えるに違いない、文句のつけようがない最強のレスラーよ出てきてくれー！　そして誰とは言わんが口だけのエセレスラーたちを駆逐するんだ（笑）！

さて、今年は大変です。二大メジャーの新日本プロレス・全日本プロレスが絶縁したうえに、もはや完全にお茶の間に浸透したPRIDEとK―1の垣根も低くなってきました。各団体も主力選手が離脱や移籍を繰り返し、世代交代や新しい格闘スタイルの参入もどんどん進んで…いったいどんな格闘ドラマが起きるんでしょう!?

またワールドカップも開催されますっ。観戦チケットは私みたいにノンビリしてたら絶対手に入らないらしいので（苦笑）テレビの前から動けない日が続きそうです。
映画ファンとしては『地獄の黙示録　完全版』『スターウォーズ　エピソード2』『ハリーポッター2』『スパイダーマン』など超大作が目白押しっ。
うーん、書き連ねただけでワクワクするな～。今年は働きがいのある一年になりそうです♪

担当の丸宝さん、週刊プレイボーイの貝山さん、由木デザインの真島さん、執筆中はいろいろと助けていただいてありがとうございました。本当に、本当にお疲れさまでした。
またユキ・ワークスの村沢さん。いつも新日本プロレス観戦に誘っていただいてありがとうございますっ。皆さまのお助けが無ければここまで楽しく執筆することはできなかったでしょう。心から感謝しますっ。
そして何より、ゆでたまご先生！　今後も『キン肉マンII世』を楽しみにしてますっ。
万太郎の活躍を一読者として応援させてください！
それではまた、次の作品でお会いしましょう。

1月某日　　浅野智哉

TEAM MUSCLE PRESENTS

特集 ヘラクレス・ファクトリーとは?

本編の舞台となったヘラクレス・ファクトリー。この場を借りて、伝説超人(レジェンド)である私、ロビンマスクがヘラクレス・ファクトリーを案内してあげよう。

超人格闘術大学校復活!!

太古より、地球はしばしば悪行超人に苦しめられていた。そんな悪行超人たちを打倒すべく、若き正義超人を育てるために設けられたのがヘラクレス・ファクトリーだ。これは超人格闘術大学校の通称で、なんと2000年前にアンドロメダ星雲のレッスル星に設けられた歴史ある学校なのだ。地球、キン肉星に住む正義超人は、14歳になると皆レッスル星に送られ、4年間みっちりと訓練を受ける。その中で成績のいい者が、悪の手から人類を守る使者として地球に派遣されるというわけだ。もちろん私も卒業生なのだが、地球に平和が訪れて28年間、ヘラクレス・ファクトリーを閉鎖してしまったために、新しい正義超人が育たなかった…我々はすっかり平和に浸りきっていたようだな。反省しよう。しかし、再び悪行超人が動き始めたために、3ヵ月という短い期間で若い正義超人を育てるべく、ヘラクレス・ファクトリーを開校したのだ。





ぐわっ
くそ
↑この他に熊やライオンとの格闘も…
この地獄に耐えられた者だけが立派な正義超人となり得るのだ!
地獄の訓練風景
しかし そこには悪行超人に立ちむかう以上の地獄が待っていた
→頭に鉄球をつけてのロッククライミング
ひぃ――
あつ～い
鉄板焼バトルロイヤル!
→当然、この訓練では犠牲者も多い。弱い者に待つのは"死"のみ。
ぐわっ!

情熱の教師陣と教育理念



↑全てはこの一言から始まった!

強敵な悪行超人を倒すためには、地獄のような訓練は当然、甘えなんかはもっての外だ。強い者だけが卒業資格を得られるため、生徒自身も他人を押しのけて這い上がっていくわけだ。しかし、そんな中でも"友情"の大切さはしっかり覚えなきゃいかんぞ。教師も情熱溢れる伝説超人(レジェンド)である。情熱ゆえに、地獄のような試練を与えるが、全てはこれから悪行超人との生死を賭けた、過酷なリングへと登らなければいけない生徒と、地球の平和を想ってのことである。


ウルフマン先生
出 身:日本

ジェロニモ先生
出 身:アメリカ(オクラホマ)


ラーメンマン先生
出 身:中国
必殺技:レッグ・ラリアート


バッファローマン先生
出 身:スペイン
必殺技:ハリケーン・ミキサー



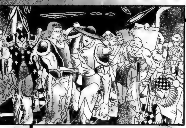


←ロビンマスク先生、教壇に立つ。

↓生徒と平和のため…愛のムチ!



卒業、そして…



↑訓練を終え、精悍な顔付きに。しかし…

過酷な試練に耐えた生徒は、入学時よりも一回り大きくなる。今期の生徒もなかなか立派になったものだ。しかし、これで卒業だと思ったら甘い、卒業テストが残ってるぞ。"ヘラクレスの掌(てのひら)"に設置したリングで、伝説超人(レジェンド)との1対1の勝負に勝った者だけが卒業できるのだ。

見事卒業した10人の新世代正義超人(ニュージェネレーション)よ、見事であった…。我々に代わり地球を守ってくれ(涙、涙)。



↑対戦相手は、なんと!?



第一期卒業生

- アポロンマン
- ガゼルマン
- キン肉万太郎
- ゴージャスマン
- ジ・アダムス
- ジャイロ
- セイウチン
- テリー・ザ・キッド
- ナムル
- バーバリアン

↓希望と不安を胸に、地球へ旅立つ。





キン肉マンII世 超人図鑑

それではここで、キン肉マンII世に登場する超人たちを徹底的に紹介しよう。

サンシャイン



元・悪魔六騎士。現在は悪魔超人のヘッドとなり打倒正義超人に燃える。

テリーマン



キン肉マンの名パートナー。持ち前の粘り強さで、数々の名勝負を残した。

ザ・ニンジャ



元・悪魔六騎士。スグルらの友情パワーに心打たれ、正義超人になった。

キン肉アタル(ソルジャー)



スグルの実兄。王位争奪戦に参戦し、王家の心得をスグルに伝え、消滅した。

ブロッケンJr.



厳しい修行とドクロの紋章により、人間から超人となった。ジェイドの師。

MAX(マックス)マン



祖父、スニゲーターの代からキン肉マンに恨みを持つ。スニーカーに変身する。

テルテルボーイ



ケータイ電話の特質を活かした攻撃が得意。万太郎公式デビュー戦の相手。

ケビンマスク



ロビンマスクの息子。クールさで絶大な人気を誇るが、その実力の多くは謎。

ジェイド



ファクトリー二期生のリーダー格。ブロッケンJr.に拾われ育てられた。

チェック・メイト



ナイトメアズ。サンシャインに育てられた。全ての負の感情を持たない完璧な超人。

レックス・キング



ナイトメアズ。右手が恐竜の首になっている。バーバリアンを真っ二つに引き裂いた。

デッド・シグナル



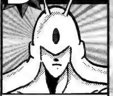
ファクトリー二期生。交通規制を駆使した攻撃で、万太郎を苦しめた。

スカーフェイス



ファクトリー二期生だが、素顔はなんと…ケビンがその秘密を握る。

クリオネマン



ファクトリー二期生。透き通った体に相手を取りこんでしまう攻撃は強力。

ボーン・コールド



ノーリスペクトの中でも最強。正義超人専門のヒットマン。

ハンゾウ



ノーリスペクト。対戦相手の顔の皮を剥ぎ取り集める。

フォーク・ザ・ジャイアント



終身刑の悪行超人ノーリスペクト。650人の兵隊を惨殺した"生きる凶器"。

ザ★農村マン



兄弟と病気のおっ母のため、超人オリンピック出場を目指す。

イリューヒン



ロシア代表の強敵。様々な飛行機に姿を変え、その翼で相手を切り裂く。

ヒカルド



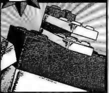
ブラジル代表。関節技のスペシャリスト。ケビン同様その素顔は謎。

バリアフリーマン



スウェーデン代表。その名の通り老人を大切にする、究極の癒し系超人。

レゴックス



オランダ代表。無数のブロックでできたその体は、様々な形に変化する。

チヂミマン



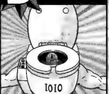
韓国代表。蹴りを得意とし、超人オリンピック一回戦でケビンと当たる。

プリクラン



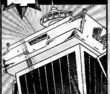
クロアチア代表。プリクラに相手の姿を取りこんでしまう攻撃は不気味。

ウォッシュ・アス



ベンキマンの愛弟子。ウォシュレットを使った攻撃は師よりも新しく、強い?

摩天楼(テンロー)



アメリカ代表。伸縮自在の巨体に捕まると、技を外すのは至難の技。

ハラボテ・マッスル



元・委員長。かつては絶大な権力を握ったが、現在はそのポストを息子に譲る。

キン肉真弓（まゆみ）



キン肉スグルの父親であり、キン肉星先帝。ハラボテと良きライバルだった。

デストラクション



イラク代表のパワー系超人。頭部にある3本の角で相手を切り裂く。

二階堂凛子（リンコ）



現役女子高生。マリの娘である由縁か、次第に超人格闘技の虜になってゆく。

二階堂（にかいどう）マリ



かつてスグルを愛した女性。幼稚園の前に捨てられていた凛子を拾い育てた。

ミート



スグル、万太郎親子二代に仕え、その頭脳と勇気で正義超人を救うこともしばしば。

ジャクリーン・マッスル



ハラボテ氏の令嬢。その美しくグラマラスな容姿とは裏腹に、激しい気性を持つ。

イケメン・マッスル



ハラボテ氏の長男で、超人オリンピック委員会の新委員長。顔は暑苦しい。

ミンチ



キン肉星シュラスコ族の族長。ミートの生立ちと何か関係があるというが…。

この作品の感想をお寄せください。

あて先　〒101-8050
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
集英社　スーパーダッシュ編集部気付

ゆでたまご先生

浅野智哉先生

キン肉マンⅡ世①
〜伝説の序章〜　ヘラクレス・ファクトリー編

原作&イラスト　ゆでたまご
文／浅野智哉

集英社スーパーダッシュ文庫

2002年2月28日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

発行者
谷山尚義

発行所
株式会社　集英社
〒101−8050　東京都千代田区一ツ橋2−5−10
03(3239)5263(編集)
03(3230)6393(販売)・03(3230)6080(制作)

印刷所
大日本印刷株式会社

ISBN4−08−630072−9 C0193



古来の野獣の血を引く虎ノ介たち
ハムランムル。血族の支配を企てる
リンフォード伯爵は、彼らを
追って獅子の血を引く従姉妹を
放った！　一方、虎ノ介たちは
危険を逃れて札幌に潜伏。
素姓を偽り、女子高生の
自宅に下宿する虎ノ介。平穏な
生活を手に入れたのも束の間、
近辺で暴行事件が
相次ぐ。それを糸口に彼らの
居所が伯爵の耳に…!?
大混乱の事態で新たな
ハムルが覚醒する、
衝撃最新刊！







謎の穴堀り集団・山水ジオテクノの正体は異星人!「鉄床石」を探し集める彼らの目的は、石の位置が示す宇宙のお宝。高校生の要平たちを巻き込んだ発掘作業が、なんと大地震を引き起こしてしまった！　中央政府が乗り出す非常事態に女社長・備絵の下した決断は!?　遂に「鉄床石」の謎が明らかに…!!



東京に潜む闇の怪物・ゼロを
追うハンターの玲香と誠。
都内ではゼロの事件が
同時多発。玲香は過去の
悲しい事情から複雑な
心境で捜査にかかる。
そんな彼女が、
なんとゼロにさら
われてしまった！
事件の背後には
最強の敵の存在が!?
魅惑のハンターの
華麗な技が炸裂
する、大興奮の
最終章!!





恭介・まどか・ひかるの
青春ラブの新ステージ
第２弾! 学生カメラマン
として中東の戦場へ
行った恭介。帰国後、
まどかのそばで平穏に
過ごす最中、なんと
NYでひかるが失踪!
現地へ飛び、捜査を
始める恭介とまどか。
彼女の身辺を探るうち、
事件は意外な展開へ…!
多くの謎と共に交錯する
３人の恋模様。
今回はNYを舞台に
ミステリアスに展開する!!



偉大な「神」によって統括
される壮麗な大陸。その
中心に位置する湖は、
世界の秩序を守る
竜・フェーが棲むという。
湖の心が読める
少年・ツキノは、ある時
小さな赤子を連れた
少女・サキシを助ける。
その赤子こそ大陸の
未来を握る「神の子」
だった…！　小さな
生命に託された
大陸の運命を描く！

